



# 先輩教師からのメッセージ

— 高等学校・特別支援学校編 —

# 先輩教師からのメッセージ

—高等学校・特別支援学校編—

まえがき

「団塊の世代」の大量退職に伴い、様々な分野において、長年にわたり蓄積してきた知識や技能をいかに後進に継承していくかが社会的な課題となっております。教育の分野におきましても、教育職あるいは教育行政職としての専門的な知識・技能や実践的指導力を、後輩教職員に伝えていくことが求められているところです。

学校教育を取り巻く環境は、高度経済成長、国際化、情報化、少子化といった時代の流れの中で、大きく変化してきました。これらに伴って生じた課題に対応しながら、この世代の教職員の方々は、まさに学校の中核として、児童・生徒の指導に尽力されてきました。

当センターでは、この世代に蓄積された経験知を後世に伝え、本県の学校教育の充実に役立てるため、平成十九年度、「団塊の世代」の小・中学校教職員に、後輩にぜひ伝えたいことについて執筆を依頼し、長年の教職体験を踏まえた経験知を小冊子にまとめました。今年度は、高等学校・特別支援学校の「団塊の世代」の先輩教師・学校職員に執筆を依頼し、本冊子にまとめました。お寄せいただいた玉稿は、それぞれ児童・生徒指導や学習指導、自己啓発等の視点から書かれており、後輩教職員が日頃の教育活動を展開するに当たり、示唆を得られるものと存じております。

学校をはじめ関係機関においては、本冊子の作成の意図をご理解いただき、教育活動の充実の一助として、ご活用いただければ幸いです。

平成二十年十一月

栃木県総合教育センター所長 鈴木健一

まえがき

1

生徒と共に

言葉の力	田村和江	8
実践活動の中から得た教訓	穂山幸一	10
教員になった日	五月女政巳	12
自然の中で体験活動を	川崎勉	14
子どもたちの懸命な学びの姿から	田村重夫	16
心のふれあいで学んだこと	大谷美恵子	18
舎生と共に歩んできた日々	竹沢イネ子	20
「班ノート」から	村井和子	22
生徒一人ひとりの頑張りを支える先生に	猿山美代子	24

授業にかける

授業について考える	小川通	28
家庭科の教師として心がけていたこと・やり残したこと、二題	上野淑子	30
私の原点	大宮孝雄	32
数学教師として教壇に立つて	生野修郎	34
授業に思うこと	藤田一夫	36

時を超えて

学校事務 昨今	菅原茂	40
「許容範囲」と私の「戯言」	星周二	42
特別支援教育の目指すもの	稲葉隆	44
時代が変わっても受け継がれるもの	金子友昭	46
生徒との日々の対応を大切に	大森知子	48
事務職員として	河又盛久	50
養護教諭として四十年間過ぎてみて	玉田聖子	52
寄宿舎教育の変遷に思う	佐藤文雄	54
教育成果の検証	五味田謙一	56

教育への姿勢

生徒のために何ができるかを問え	堀信子	60
謙虚に学ぶ姿勢が大切	藍田收	62
教育行政と学校の現場	植田俊夫	64
見据えているもの	岡田徹	66
感謝	大栗克元	68
人は認めてくれる人を認める	根本進一	70
雑用が多くて	伊藤孝信	72
一以て之を貫く	田島一利	74

ある保護者との出会い	浜野英一	76
病気でなれた素直な生き方	三上隆敏	78
しなやかに生きる	奥中栄二	80
教員生活における「私の心得」	石川政一	82
足を使う	関口伸一	84
定時制二十三年間の勤務から得たこと・考えたこと	篠崎一夫	86
自分らしく	伊藤節子	88
私がめざした(ている)三人の師	和田貞夫	90
関係が教育する — 教育を支えるもの —	本間友章	92
出会い	河又利博	94

自己を見つめる

人は魅かれて生きる	村松慎介	98
一般の人向けの日本古典文学講座	熊倉茂	100
貯金をしよう	手塚真砂子	102
「教師力」生徒愛×情熱×創意工夫	野澤正憲	104
男子たるもの厨房に入るべし	都野祐俊	106
読んだ本について	増野春	108
部活動の楽しみ	井上充男	110
趣味を持つとう	小林浩行	112

遊・学	渡邊博史	114
部分の充実を全体へ	立川雅康	116

専門を貫く

音楽が与えてくれた出会い	沼尾守夫	120
振り返れば反省することばかり	飯島二郎	122
教員生活を顧みて	下妻久男	124
家庭の教育力を高めるために	佐々木さと子	126
「生きる力」をはぐくむプロジェクト活動	小森芳次	128
当たり前のことではあるが	立野美奈子	130
私を取り組んできたことを振り返って	角田重雄	132
高校時代の思いを貫いて	茂木幸子	134
体験させたい「ドキドキ・ワクワク」	橋本暁	136
退職に思うこと	渡邊道子	138
泣き虫 体育教師	大島喜代子	140
命が教えてくれる教育	柴田富男	142

編集後記

生徒と共に



若い世代の学生・生徒たちが、メールに夢中になっている光景は日常的である。歩きながらでも電車の中でも眼は文字盤に釘付けである。登下校時の生徒同士の賑やかな会話姿も過去形になりつつある。昨今、この文字盤を介した言葉のやりとりが背景にあると思われる事件、事故が毎日のように報じられており、心が痛む。子どもの頃から何気ない日常の会話や体験から、喜びや悲しみ、達成感や挫折感、痛みや心地よさなど言葉への感性が育まれていくものである。言葉は文字羅列化し、自分の考えや思いを伝える生きた言葉になっていないように思われてならない。高校生たちの間で飛び交う記号化された言葉が気にかかっていた時期、新聞で「朝起きて、誰もいない台所にボツンと置いてあるまだ温かいお弁当、もう少し早く起きたらありがとうと言えたのに」という男子高校生の投稿を目にした。素直に伝えられないでいる母親への、感謝の気持ちと優しさのこもった言葉に癒され、何度も読んだ。

我が若き頃の不明の言葉から起きた、今も忘れられない体験がある。三十数年も前、教育実習から二週間ほど経て、我が家にかわいい訪問者があった。担当した小学校一年生のY君であった。「先生が子どもとお別れの時、近くに来た折りはいらっしやいと。子どもにせがまれて伺いました。」伴ってきた父親から丁寧な挨拶を受けた。驚くやら嬉しいやら、そして自省の念が交錯した一瞬であった。純粋な児童たちに発した外交辞令の不用意な発言に恥じた体験だったが、その後、Y君からの高校、大学、社会人へと時節毎に届く近況報告の挨拶状は私の教師人生を支えてくれた。

また、高校教師駆け出しの頃、曖昧な言葉による苦い体験もあった。事の起こりはH君に課したレポートの提出期限をうっかり日曜日を設定してしまつたことからだつた。彼はこれに気づいて「月曜日でもいいということですね。」と。私、「いいえ、土曜日までに頑張つてきなさい。」結局、土曜日には提出されなかつた。ところが日曜日の昼頃、家の電話が鳴つた。H君からで、期限までに課題を届けるべく自転車であつたこと。彼がかけてきた公衆電話の場所まで迎えに出た。こうして我が家にてレポートが確かに提出された。彼は息子たちとお昼を囲んだ後、再び二十数キロの帰路についた。無事自宅に着いたとの連絡にほつとした日のことを思い出す。生徒への不適切な発言を大いに反省した事件であつた。彼は卒業後、法学部に進み外務省に勤務したとの風の便りに、活躍を祈つた。

この三月は、次に紹介する二つの言葉に出会つた。「春はたくさん挨拶を聞く時期、聞く人はその言葉を聞いているのではなく、その人のやつてきたこと、言葉の寸法を測っている。びつたり一致していたり、言葉の方が慎ましくも小さかつたりした時、いいなあ、本当のことを聞いたと思う。」という自身に問いかける言葉。「たくさん叱つてくれてありがとうございます。おかげで今の自分があります。」という卒業式で生徒から贈られた言葉である。これまでの教師生活で、最も感動し、これ以上の言葉はなかつた。突然の卒業生からのこの言葉に、先生方は込み上げてくるものを押さえきれず、まさに涕泣<sup>てききり</sup>だつた。生徒と教師が同じ想いを共有した言葉だつたからである。

今回の原稿依頼で、教師生活を振り返る機会をいただき、生徒から届くメッセージが教師の「生きる力」となつていたことを再認識した、教師三十七年目の「熱い」夏だつた。

## 実践活動の中から得た教訓

教師生活の中で忘れることのできない思い出は、県立栃木工業高校の創立三十周年記念事業の一環として行った、「タイボランティア活動」である。この活動には準備段階から十数年間にわたってかかわった。一九九一年二月に第一回の活動が開始されてから、まもなく二十年目を迎えるようとしている。

この活動は、生徒たちが学んでいる技術を活かし、直接タイ王国の福祉施設に向き、施設の壊れた車椅子を修理すると同時に、地域の福祉施設から寄贈された、中古の車椅子を修理して寄贈する活動である。この活動を通して、生徒たちが修理し、寄贈した中古車椅子は二〇〇八年六月現在千七百台近くになる。一方、栃山高から始まった「空飛ぶ車椅子」(中古修理車椅子の寄贈活動)は、全国五十六の高校へと活動の輪が広がり、約五千台を超える車椅子が協力団体を通して、東南アジアを中心とした福祉施設に寄贈されている。この活動は現在も継続され、活動範囲はさらに広がっている。

この活動背景には、これから到来するアジアの時代に向けて、日本とアジアの国々の歴史的背景を理解し、欧米崇拜方の目線ではなく、アジアの人達と同じ目線に立って、物事が見られる生徒たちを育てたいという、校長の熱い思いがあった。

だが、当時は、高校生のある東南アジアへのボランティア活動は困難とされていた。協力依頼に訪れたJANISを始めとする十数ヶ所の国際協力団体が、一様に一地方の工業高校の活動に驚きと賞賛の声を寄せてくれたが、協力してくれる団体はほとんどなかった。今日、三千社近い日本企業が進出している現状など想像すらできなかった。まさに、当時の校長の大英断であった。

この決断を目の当たりにした者として、後に裁量権者の先見性と決断力がいかに大切かを知ることとなった。

以後、この実践活動を通して、学んだ教訓を挙げてみたいと思う。

一つ目は、この活動の唯一の協力者が話してくれた言葉である。『活動を開始したら、一年で止めてしまわないこと。もし、一年で止めてしまったら、あの学校は『海外研修』へ行っただけ。』と言われ、三年継続すれば『あの学校は『海外研修』へ行っただけ。』とされているらしい。』と言われるようになるでしょう。五年継続すれば、『あの学校は『海外研修』へ行っただけ。』とされているように、活動成果が評価されるでしょう。』そして、『十年継続できれば、活動実績・評価と貴校の道ができるでしょう。』、『開始したら、三年間は是非継続して下さい。』そして、『継続につながる若い後継者を育てることを忘れないでください。』と言われた。

二つ目は、「教師は、生徒たちに色とりどりの種子をどれだけ持ち、それを蒔くことが出来るかではないか」ということである。そして、「蒔いた種子をいかに結実させるか」である。これには、「種子をまく人、水をやる人、育てる人、励ます人」が必要だとよく言われる。この生徒たちを育成する『学社連携』の輪を作るのに、学校は最適な場所だと思っている。

また、これらの活動を通して、生徒たちは国内外の多くの人達との出会いの中で、自己実現に向けての「気づき」をもらい、異文化理解をし、「共に生きる」ことの大切さを肌を通して身につけている。しかし、どんなに時代が変わっても、教師が根底に持っていなければならないものは、生徒を愛し、一人の人間として「共に学び合おう」とする心ではないかと思っている。

大学四年、仲間たちも故郷での就職活動が始める頃、私は何となく流れの中で採用試験を受けたためか、卒業後教員になる実感が沸いたのは勤務先の通知を受け取った後だった。はつきりとした抱負も自信もやる気も確認できない不安な心境のまま、赴任地へと向かった記憶がある。関東平野の真ん中で育ち、学生生活になじんでいた私が向かった東北の学校は、共学で普通・家政・農業・水産科を有する、地元に限差した学校であった。山間を抜けた丘の上に建っていて、行き着いた時の異環境ショックは今でも新鮮に覚えている。漠然とした気持ちのままスタートする中、未だ自分の今後のあるべき姿を模索し、何時この状況から抜け出すかと考え悩んでいた頃に事件は起きた。職員玄関に向かって出勤途中、三年教室前を通り過ぎようとする時、「ホーツホーツ」と何度かこちらに向けた声が聞こえてきた。咄嗟に（私がかかわれていると感じた）次の瞬間、声の方へ走り出していた。一気に教室の窓を飛び越えると、廊下を逃げる後ろ姿から、当時番長と言われていたAだとすぐ分かった。教室を出て廊下を走り二階への階段を登り切ると、大柄なAは息を荒げながら私を威嚇する様に立っていた。私は息つく暇もなく、問答無用とはかりに「からかう気か！」と叱ると、Aは予想に反し「すいません！」と素直に頭を下げた。後にその時のホーツは、私の前を歩いていった外部の若い女性に向けた声だと分かったが、そんなことはどうでもよかった。Aが言い訳せずに謝ってくれたことと、今まで味わった事のない不思議な教師感覚が沸いてきた喜びを覚えている。

その後のAは多少の問題は起こしたものの、無事卒業し地元の会社に就職した。そして

数ヶ月後、突然、Aが事故で死んだとの知らせを聞いた。友人と弟を乗せ、停車していたトラックに追突し三人とも即死のことだった。事故の状況は極めて悲惨でAの顔は左半分がない状態だった。訃報が届いた瞬間、就任後初めて本気で生徒と対峙したその瞬間の記憶が鮮明に蘇った。後に、残された妹が入学したが、Aの話は交わさなまま卒業した。

その後、私はあちこちの画廊を借り、美大時代の夢の続きを追いかけて個展を開いていた。そんなある日、突然Aの妹が会場に訪ねて来た。「新聞で先生の名前を見て兄を思い出し！」と大粒の涙を流しながら話を始めた。妹は結婚して子どももでき、すっかり母親の雰囲気を書き替えていたが、在学当時は事故の記憶を消したくて兄の話は：とも話してくれなかった。「兄は、生前、先生に叱られた話を繰り返し、自分を本気で怒ってくれたのは先生だけだ、もっと早く逢えていたら：と話していました。」と言うと、つかえていたものを吐き出したかの様に帰っていった。ただ、その場に残された私にはAに感謝されていたという想像外の喜びと、あの時の私の単純で身勝手な腹いせとも思える言動がAの為になっただのかという気持ちと交錯し、そこには、教師？教育とは？がよぎった瞬間でもあった。

今振り返ると、そんな出来事が後の私の教師生活を支えてくれた原点になった気がする。決して体罰や結果良しの指導は肯定できないが、全て目先の結果ばかりが求められる最近の傾向に、教師自身が周囲への気遣いに神経を擦り減らし、腰が引けた指導になり、生徒と正面から対峙する本来のあるべき姿が消えかけている様な気がする。社会・家庭教育が崩壊している今日、教師一人ひとりに課せられた使命は重く厳しいものがあるが、外野の評価や目先の結果を考え過ぎず、ひたすら生徒のためを思い、力いっぱいご活躍下さい。

## 自然の中で体験活動を

経験が、人を育ててくれる。知識も経験を伴って初めて身に付く。

旧佐野市の北方に県立公園の唐沢山がある。そこを活動の場として、唐沢子供会という団体があった。小学校五年生の三学期から入会できる。そこでは、自然の中で活動するための知識と技術を教えてもらった。唐沢山近隣の小・中学校の先生方が指導者だった。

その知識と技術を身に付けるための実践の場が、夏のキャンプだった。中学生になると、移動キャンプといつて、唐沢山以外の所でのキャンプになる。古峰ヶ原、塩原、日光のいわゆるキャンプ場ではない所でのキャンプをした。開拓キャンプともいった。

三泊四日を過ごすための、生活の場を自分たちで作る。テントを張る場所の整地から始まり、かまど、トイレ、調理場、洗濯物干し場。いかに工夫を凝らして作ったかを競い合う。表彰され、賞品まで出るのだから、夢中だ。火を熾すことも、料理を作ることも、洗濯の仕方も、みんなここで覚えた。

教職に就いて、二年目で一年生の担任を任された。生徒たちには、自分の経験から、一人で生きてゆける力を身につけてほしいと思った。だから、もちろん勉強は頑張つてほしいし、常識も身につけてほしい、と願った。

でも、担任して最もやりたかったのは、キャンプに生徒を連れてゆくことだった。実行した。本当は二泊したかったが、管理職からの許可は、一泊二日。でも、「よく許可してくれたなあ。」と後で思った。今になって、あのときの管理職の勇気がわかる。

夏休み。担任していた生徒の四十五人中、四十四人の参加を得て、奥塩原でキャンプを

した。生徒たちはみんな自転車で走ってきた。長距離で、しかも、長い上り坂。小川町からの生徒が、一番遠かったろうか。朝、暗い内に家を出て、着いたのが午後二時という生徒が最後。

夕食準備までの時間。遊びのリーダーが生まれる。疲れているはずなのに、その辺にあった生木を使ってポールを作り、サッカーが始まった。生徒たちの驚くべきエネルギー。

夕食は定番のカレーライス。調理から後片付けまで、生徒たちの行動を観察。キャンプに来てまで、担任として生徒の評価をするつもりはない。しかし、よくわかる。要領のいい生徒がいる、仕事の段取りの悪い生徒がいる。包丁の使える生徒、ご飯の炊き方がわからない生徒。いろいろだ。しかし、自然に、自分のできることを分担してやっている。

一人で生活できるようになってほしい、という私の願いが少しはかなえられたらうか。生活するために必要なことがわかったらうか。

夕食後は、みんなで相撲を取った。私も、副担任の先生と取った。その後、怪談話などしながら、近くの共同温泉場に入りに行った。男同士の裸のつきあいだ、ホントに。

今、振り返ってみると、TVの学園ドラマのようだ。

修学旅行やクラスマッチ、学校祭に部活動。生徒にはいろんな体験活動をさせたい。ゲームや携帯電話など、機械類の目覚ましい普及。だからこそさせたい自然の中の活動。キャンプに行くのは、昔に帰るようだけど、後退ではない。生きる力がきつと身に付く。

人間は、自然の中の一部だということ。そして、あのキャンプを経験した生徒たちの自信を実感した夏の出来事である。

## 子どもたちの懸命な学びの姿から

長期間入院している子どもたちのために、病院内に分教室が設置されています。病気の治療をしながら学習する教室です。分教室には数名の専任の教師が常駐しています。子どもたち（小・中学生）が長期入院することになると、入院期間中、病室から教室（病室に隣接）に通うこととなります。午後は、病気の症状によって教室に来られない子どもたちのために、教師が病室に行き、ベッドサイドでの授業など個別指導をしています。教師は、子どもたちが退院して元の学校に復帰したときに困らないように、一人ひとりの進度を考慮し学習を進めています。

子どもたちは病室という狭い空間に長期間閉じこもっていて治療を受けています。ややもすると、ストレスが溜まり気持ち落ち込んだり何事にも消極的になりがちです。子どもたちが明るく元気に前向きに治療に向かい合い、学習に意欲的に参加するために、教師は様々な取り組みをしています。病院関係者と密接な連携を図り、常に各人の病状や心情を把握し、日常の会話等にも十分配慮をしています。学習が単調にならないよう、教材・教具にも工夫をこらし、実験・実習等も取り入れ、時には校外学習も実施しています。ここで行われている授業は、和気あいあいとした雰囲気の中で、子どもたちも教師も真剣で実に生き生きとしています。病院の担当医の話では、教室で学習するようになった子どもたちは、治療にもとても前向きになり、よい結果をもたらしているとのことでした。

中学生のA君が人生の幕を閉じました。明るく何事にも前向きな性格で、懸命に勉強にも治療にも取り組んでいましたが、病状が悪化してとうとう帰らぬ人となってしまいました。なんとも悲しいでしょうもない現実です。いつも授業が始まるのを待ちかねて、早くから教室にきていました。得意な教科書の内容はすべて覚えてしまうほどでした。高校への進学に向けても頑張っていました。進学の夢は果たすことはできませんでした。

教室に出席できなくなっても勉強の意欲は衰えず、ベッドサイドに通って指導してくれる先生の指示に従い、最後まで頑張りました。担任を始め教師たちも心からA君の回復を願いつつ、お互いに心をかよわせ合いながら、力を入れず自然体で一歩ずつ可能な限りの指導・支援をしました。不安や辛いこともあったと思われる病床のA君が、最後まで希望と勉強への意欲を持ち続けていたことに心を動かされました。A君にとって分教室での勉強は心の支えであり、元の学校に復帰したときに困らないようにということだけでなく、学ぶ瞬間・瞬間がとても大切で価値のあることだったと思われまます。

闘病中であっても、子どもたちは一人の人間として精神的に大きく成長してゆきます。それだけに、ここでの学びは純粋で貴重で大切なものです。私たち教師は、子どもたちのために、今できること・やらなくてはならないことを、本当に真剣に取り組まなくてはならないと、ここでの子どもたちの懸命な学びの姿を通して改めて痛感しました。

## 心のふれあいで学んだこと

「先生は、どうして養護教諭になったのですか」と、生徒から、幾度となく質問を受けてきました。長い期間、理想的と思える返答をしてきました。生徒の心には響いていないことは感じており、そのうちに偽っていられなくなってきました。あるとき、正直に話すことになりました。第一希望の分野の大学には進学できなかったこと。受験科目が類似していて、受験したら合格したので入学したこと。何とも恥ずかしい進学理由だったのです。しかし、看護師の勤務体制は、体力的に無理があると受け取ったこと。看護師の国家試験合格を条件として、教育学部に養護教員養成課程がある大学の存在を知り、受験し直したという顛末であること、今はこれらのことを正直に話すようにしています。現在、高校での進学指導は、将来の職業に向けて進学を考えるのが正論ですから、私の進学理由など邪道なことです。こんな話は生徒のためにはならないと考え、封印してきたのかもしれない。

このように正直に答えてから、必ず付け加えることがあります。一つは、自分の進路は、いろいろな人に相談しても、最後は自分で考え、結論を出すものだということ。そして、出した結論は、できうる限り実現して欲しいこと。自分が熟慮して結論を出せば、不思議と困難を乗り越えられるものであること。二つ目は、高校卒業時に、このようなスタートが切れば理想だが、自分から勉強したいという気持ちが大切で、決心した時が発発であることを話しています。このように、本心を話すようになってから、生徒との職業や進路についての相談・面接が充実してきたように思います。

A子さんとの出会いは、印象的でした。私が転任後まもなく、年度当初の保健行事や、総合学科の複雑さに不慣れで四苦八苦している時に、「先生、お疲れさまです。授業に出られる状態になったので、教室に戻ります。カードは自分で記入しました。先生は『この時間は休養していた方がいい』と言ってくれました。ありがとうございました。生理痛がさばりではないと言って信用してくれて、とてもうれしかったです。先生ががんばってください。」と書かれたメモが机上に残されていました。原則として、生徒が休養している場合は、保健室を不在にしたくはないのですが、そのときはそうはいってられない状況でした。また、前年度まで不登校気味であったという彼女が、養護教諭である私にこんな優しいメッセージを贈ってくれていました。その時の感激は、今でもはっきりと覚えています。その彼女が、いったんは会社に就職したが、養護教諭になりたくて進学したと報告にきました。「先生が話してくれた、『自分の進路は自分で悩み、自分で決めなさい。そして出したことの責任は自分でとりなさい。そう決心したときが発発よ。』と言ってくれたので受験勉強をがんばりました」と、喜々として話している彼女は輝いています。

私が話したことをこんなにも長く心に留め、努力し、実行してきた彼女に敬意を払うとともに、責任を感じているところです。

その時その時を、誠実に、正直に生きることに。これが、三十八年間の教員生活から学び、これからもそうありたいと願っていることです。

## 舎生と共に歩んできた日々

定年を目前にして、寄宿舎指導員になれたこと、そして、自然がいっぱいの旧寄宿舎と設備の整った新しい寄宿舎で仕事ができる幸福を、今改めてかみしめています。

私は、野沢養護学校（現のざわ特別支援学校）が開校した昭和四十二年に、肢体不自由児について何の知識もないまま、寄宿舎指導員（寮母）になりました。仕事内容についても何も分からず、先輩指導員の方々の言動を見聞きしながら無我夢中で毎日进行していったのが、つい昨日のことのようです。遠隔地の生徒が一〇〇名以上入舎しており、二十四ある舎室が満杯の状態でした。学校の周りは自然に恵まれており、よく散策に出かけたものです。川や野山へ出かけ蛇をつかまえて来る者や掘った植物を花壇に植える者、懸命に絵を描いていた舎生もいました。帰省日は月一回だったので、大型バスで遠足にも出かけました。また、映画部・運動部・調理部などの部活動も活発に行われました。市内のデパートに行き、買物や食事をしたことも楽しい思い出です。舎生と年齢も近かったこともあり、宿直の夜など遅くまで話し込んでしまい、先輩指導員をハラハラさせてしまうことが多々ありました。今考えると、顔から火が出る程の無茶を沢山していたように思います。周りの方々から支えられていたから働けていたことも、後になってわかりました。指導員の仕事に意欲を持ち始めた昭和四十八年、育児のために断腸の思いで退職しました。昭和五十六年、再び指導員として復帰できたときは本当に嬉しかったです。栃木養護学校（現栃木特別支援学校）に三年間勤務しましたが、家庭から離れ寄宿舎で頑張って生活

している子どもたちが一層愛おしく思えました。指導員長（寮母長）のA先生との出会いは鮮烈でした。寄宿舎教育の先駆者で、常に舎生を中心に考え、確固たる信念を持って仕事をされ、保護者の話にも十分耳を傾け支えておられたので、保護者からの信頼が厚かったのが印象に残っています。舎生のことを心から案じ、沢山の卒業生を社会に送り出した方の一言一言から多くのことを学び、舎生との関わり方も基礎から教えていただきました。栃木養護学校での三年間は、指導員の仕事を続ける上で大切な日々になりました。

昭和五十九年に野沢養護学校に戻って来た時は、舎生数は減少し介助を必要とする舎生が増えていましたが、基本的な生活習慣を身につけるため、一人ひとりに合った進め方をするように心がけました。排泄では、オムツをはずすことができた例が挙げられます。まず、排尿のリズムを把握し、定時にトイレに座ることから始めました。毎日繰り返すうちに、手を叩き体を動かしながらお話をするようになったので、座ることが不快ではないと確信が持てるようになりました。「焦らず・根気よく」その時を待ちました。「しゃー」の音に思わず中を見ると、確かに出ていました。拍手をしながら、「すごいね」と褒めると本人も嬉しそうに笑顔。私たち指導員は、舎生ができたときの笑顔が見たくて、この笑顔に励まされて仕事をしているのかもしれない。

卒業生から、「寄宿舎でしていた掃除や後片付け、いろいろな友達や先生と語り合ったり、一緒に活動したことが、卒業してから人との関係作りに役立った。」という言葉をいただきました。舎生に育てられ、舎生と共に歩んできた日々が私の人生の宝物です。

栃木県立のざわ特別支援学校 竹沢イネ子

## 「班ノート」から

定年を残すところ一年余り、仕事に追われ何とかこなしている現状を思うと、自分の力のなさに慚愧たる思いをするばかりである。そんな折、執筆の依頼があり、このような状況ではとても書くことなどできないというのが本音であったが、「教師」という仕事を終えようとしている現在、これまでに経験したことをままとめてみることも、私のけじめと考え書くことを決意した。そしてこれが、これから益々厳しくなる教育環境の中で活躍される先生方に、何か少しでも参考になるものがあれば幸いと思っている。

教師九年目に、それまでとは生徒の気質や校風の全く異なる学校へ転任し、すぐ担任となり、円滑なクラス経営をいかにすれば構築できるか、様々な資料を検討し悩んだ末に、「班ノート」を実施することにした。このノートは、私と生徒との交換日誌的な性格のものであり、生徒が自分の考えを整理したり、クラスメートとのコミュニケーションをとるきっかけになるものと考えた。重さで言うのも変ではあるが、三年間で約十kgになった。

具体的には、日付・天気・班の出勤・クラスの出来事・先生から受けた注意・学校行事、個人の欄では、起床時間・下校時間・就寝時間・下校後の生活や自分の考え等を書く欄・読んでいる本または読みたい本を書く欄がある。六名位で班を作り、朝提出し帰りまでに教師側がコメントして戻すものである。生徒は六日に一度位の記入なのであまり負担にならない。

今読み返すと実によく書いてくれたと思う。現在の生徒の中には、クラスに関心がなく、欠席している生徒の名前も分からなかったり、いやだと思ったら話しかけようともせず、

自分の小さな仲間だけで良しとしている。そのため、その仲間で仲違いしようものなら居場所がなくなってしまうことが多い。当時の生徒は「班ノート」の意味を理解してくれたのか、班毎に話しあい、それをクラスへと議論を發展させていった。

生徒が自分の考えを整理し、コミュニケーションができるようになると、教師側は「立派な社会人」として成長させるためにはどうすべきかいろいろ考え、班になげかけた。例えば、性に関する本を用意し、班でまわし感想を書かせ、班毎に話し合わせてからクラス討論させたりした。多感な青年期にしっかりと受け止め、前に進んでほしいと考えてのことだった。「自分を好きになる」このテーマも自分を受け入れ、自分に自信が持てるよう努力しようと考えさせていった。

また「高校生の子を持つ親へのメッセージ」として、機会あるごとに「親は高校生にどう接し、育てていくべきか」といったプリントを準備し、面談を待つ間等に読んでもらった。親にも成長し、躰けるときの拠り所を持って、自信を持ってもらいたいと考えた。

以上「班ノート」に始まった生徒に対する試み、親に対する試み、すべて一人が考えて実施した訳ではなく、周りの多くの先生方から助言や資料をいただいでできたことである。教育を進める中で最も大切なことは勿論、生徒とのコミュニケーションであるが、それをより充実させていくものは、教師間あるいは、親との連携であると考えている。私は「班ノート」を通してある程度その目的を達成できたのではないかと思っている。

どうか先生方一人ひとりがそれぞれ工夫して、より良い生徒との関係を築いていただきたいと願っている。

## 生徒一人ひとりの頑張りを支える先生に

「小さな島国の日本が世界に誇れるものは何だろう。それは教育ではないだろうか。私は将来先生になって、子どもたちの教育に携わりたい。」中学校の卒業文集にそう書いた。小学校の頃から先生方に可愛がられ、一生懸命勉強することがとても大切なことだと思っていた。高校も一年生を終わる頃、期せずして伝統の運動部に入ってしまった。充分な能力のない身には苦しかった。とても辛かった。しかし素晴らしい指導者、仲間と出会い、歯を食いしばって頑張った。仲間と力を合わせることに、あきらめずに頑張り通す事で夢が叶うことを学んだ。あきらめずに夢に向かって頑張ることの素晴らしさを、生徒と共に味わいたいと強く願って教職に就いた。

五校目の勤務校でS男の担任になった。部活動でも顧問になった。S男が高校で始めた部活動は、関東大会は勿論インターハイにも出場したことのある伝統の部であった。S男は電車を乗り継いで通い、部活動も休みがちではあったが一年次は何とか終了した。二年次になり、学校も部活動も休むことが多くなった。校則を破って指導を受けることも多くなった。私はS男の隣のクラスの担任であり、学年主任であった。ある日S男の担任から、進路変更を希望しているので会って欲しいと話があった。S男と母親に会って意思を確認すると「はい。」と頷いた。「本当にそれでいいんだね。」と念を押した。S男は蚊の鳴くような小さな声で「学校にいられるんならやめたくない。」と言った。担任とも話し合い、S男には休まず学校に来ること、校則を守ること等を約束させた。やめたくないと思

いながら、頑張りきれないS男の踏ん張りどころだと思った。厳しい状況の中でもあきらめずに頑張り通して、願いを叶えることを学んで欲しいと思った。

三年次になり再び私が担任になった。一科目でも欠時数がオーバーしたら卒業はできないこと、校則違反があってもならないことを真剣に伝えた。これまでの夜型の生活習慣がすぐに改善することはなく、校則違反はしないものの先生方の指導を素直に聞くわけではなかったが、S男はS男なりに必死で卒業を目指した。多くの教科で欠時数を数えながらのハラハラの日々であったが、ぎりぎりのところで踏みとどまり卒業の要件を満たした。部活動でも関東大会にメンバーとして出場した。

卒業式の数日後、学年の先生方で祝う会を開いた。先生方から学年主任へと、スポーツサンダルに添えて、「下駄箱の神様へ」という感謝状をもらった。いつもまだ来ないS男を心配して、一日に何度も下駄箱を覗いては「早く来て」と祈っていた私をみんなは見ている。S男を信じて認めてくれた校長先生や先生方。眠くて、辛くて理由を付けては駆け込んでいた保健室。いつも温かく応援してくれていたみんなに感謝の涙が止まらなかった。今年の四月から病弱の特別支援学校に勤務している。疾病や障害を抱えながら懸命に頑張っている子どもたちと、その子どもたちを支える温かな先生方に囲まれ、命の尊さをしみじみ感じている。子どもたち一人ひとりの小さな声にしっかりと耳を傾け、子どもたちの頑張りを支えることのできる先生でありたいと思っている。

授業にかける



## 授業について考える

昭和四十年代後半から昭和五十年代前半というのは、高校進学率が飛躍的に高くなり、多くの新設校ができた時期でもありました。この頃、よく言われたことに「高校生の多様化」ということがありました。価値観の多様化、学力の多様化などが急速に広がり、それに伴って生徒指導も難しくなってきました。

数学を学ぶ楽しさを少しでも多くの生徒にわかしてもらいたいという意欲に燃えて教員になったのですが、授業ではむしろ数学を苦手とする生徒が多く、指導内容をどうやって理解してもらおうかと四苦八苦の毎日でした。中学校までの既習事項の定着が思うようでないために、なかなか高校の学習がうまくいかないという状態でした。仕方なく復習のためのプリント教材などを作って、必要に応じて復習しながら授業を進めていきましたが、うまくいかないことも度々あり悩み多い時期でした。教師が説明や指導に苦しみ、生徒が理解に苦しんでいる授業では、生徒も教師も楽しいはずがなく、授業効果も期待できません。

この頃、当時の県教育研修センターで「数学を苦手とする生徒の指導」をテーマにした研修が多くもたれましたが、そこでよく言われたことは、教員は教科書を教えるのではなく、教科書を使って教えるのだ。生徒が理解できないのなら、理解できるように教科書を書き換えるくらいの勢いで教材開発に取り組んで欲しいということでした。当時の数学の指導主事の先生方の励ましとご指導を戴きながら、いろいろな教材開発に努力した頃を思い出します。やはりなんと言ってもわかり易い授業が一番です。「先生、今日の授業はよくわかったよ。」という生徒の声と一所懸命に授業に取り組む生徒の姿が何よりも嬉しく、

充実感を感じることができました。生徒の反応は正直です。教師が授業の準備にどれだけ努力をしたのかが問われているのだと実感しました。

四十代になって進学校に勤務したのだと実感しました。自分などよりも数段優れた素質を持っている生徒たちを指導できることが大変な喜びであると同時に、より伸ばさなくてはということをとんでも重圧に感じました。生徒が自ら考え抜く力を育て、生徒の持っている力を十分に引き出すことを常に考えながらの授業でしたが、ここでは授業はわかり易いだけでよいのかと考えるようになりました。勿論、わかり易い授業は大切ですが、わかり易さを追求するあまり、生徒への負荷が少なく、深みに欠ける授業になってしまうのではないかと思いました。

そんな時、内容が複雑かつ高度で、わかり易い説明がうまくできないことがありました。すると、授業後何日か経ってから、生徒がこういう風に考えたら理解できたとか、それはこのように発展するのではないかなどと言ってくるのです。特に意図した訳ではありませんが、結果として生徒に十分に考えさせることができた授業になったのかと感じることも多々ありました。教育産業の発達などの影響もあり、教育界全体が何となく親切すぎるような風潮の中で、生徒を苦しめながら鍛え、結果として生徒の力を引き出していくような授業の大切さも痛感しています。

「授業第一」「授業が命」などとはよく言われますが、生徒の学校生活の中心が授業にあることは言うまでもありません。わかり易く充実した授業、そして生徒の力を引き出し高める授業はどうあるべきなのかということを常に頭に置く必要があると考えます。

## 家庭科の教師として心がけていたこと・やり残したこと、二題

### 一 「経験だけに頼らない授業」

家庭科は家庭生活を丸ごと扱う教科です。衣・食・住・保育・介護など、人間の生活や暮らしを題材として学習を進めるために、学問としての価値を見いだしにくいといわれることがあります。時に、「家庭科を学校で学ぶ意味があるのか」といわれる理由です。

本の題名は忘れましたが、「家庭科の教員として私自身忘れられない一節があります。」「家庭科の授業は、経験のない教師の在り方を見事に表現していると思います。と同時に、自分自身への戒めの言葉でもありました。衣・食・住・保育など何を題材としても、生徒は多少なりとも日常生活の中で見聞きしますが、生活経験の少ない生徒にとつて、教師の経験談は多いに興味・関心を引くことになりました。しかし、家庭科で大切なことは、経験に基づく事柄をいかに科学的・学問的に裏付け、その原理・原則を理解させるかです。今日社会の進歩はめざましく、それに伴い家庭科が扱う題材も変化しています。こうした変化に対応していくために必要なことの一つが、教師自身の豊かな経験とそれを裏付ける科学的な知識であろうと思います。家庭科の教師としてそのことを自覚し、常に学ぶことではないかと思えます。

### 二 「親となるための教育」について

平成六年四月施行の学習指導要領で、家庭科は初めて男女必修となりました。理由は、男女共同参画社会の推進という社会的な使命と、同時に、家庭の教育力が低下する中で、親となるための教育を家庭科が担うことにあつたと思つています。そのことは現行の学習指導要領においても、今回の新指導要領の改定においても変わらない柱であるはずですが、しかし、多くの場合、男女必修修になつたことで、男子の調理実習や被服の授業をどのように組み立てるかなどに力点が置かれがちでした。そのことは、指導主事であつた私自身が多めに反省するところです。家庭科がねらいとしているのは、「一人暮らしをする時のために、男子も料理ぐらいはできた方がよい」といったことではないはずで、

「将来社会人として、男女がどのように協力し、どんな家庭を築いていくのか」「父親・母親の役割とその責任とは何か」を、家庭科の授業を通して生徒に問いかけ、気付かせることにあります。衣・食・住・保育・介護などあらゆる学習の延長線上に、将来の家庭人としての、親としての在り方・生き方があり、家庭科で学ぶ知識や技術は、全てそうした在り方・生き方を支える土台であつて、目的ではないことを、教える側の教師が常に認識しながら進めるべきだと考えてきました。

現在、多くの学校で家庭科の履修単位が二単位となり、少ない単位数の中で何を学ばせるかが大きな課題となつています。しかし、昨今の社会情勢を考える時、家庭科の果たすべき役割は自ずと見えてきます。私自身は目先のことに追われ、何もかもが中途半端でやり残したことがかりですが、後輩の先生方のお力で、高等学校における家庭科の役割を、より明確なものにしていただきたいと強く願つています。

## 私の原点

ある先輩の教え「授業の中で、何か一ついい……」

新任校での四年間は、私の教員生活の原点となった。授業も、教員としての取り組みも。「理科嫌いをつくらないこと」、茂木高校の理科の先生方の合い言葉であった。ある先輩教員に大変お世話になった。私の専門外の科目、物理(こういう言い方をすると、おしかりを受けるかもしれない。理科の教員は理科のすべての科目が専門科目なのだ)を教えることになった。心もとない私を見てのことだろう、新学期早々「私の物理の授業を見ませんか」と先輩から声をかけてもらった。ありがたいことだった。

毎週一時間、一学期の間ずっと見せてもらった。授業の進め方や実験、生徒への対応など、多くのことを学ばせてもらった。そしてその先生がある日、語ってくれた言葉は、今でも忘れない。

「一時間の授業の中で、何か一ついい、生徒に見せられるものがあるといい」

この言葉を今も忘れず、授業に向かう自分への戒めとしている。授業への慣れや校務の忙しさから、平坦な授業になりがちな自分の授業。でも、この言葉を思い出すと、なぜか緊張感めいたものが自分の中に生まれてくる。そうだ、何かないか、とあたりを探し始める。実際のもの(本物)、身近な物でいいものはないか。簡単な実験はできないか。モデルになるものはないか。良い映像はないか……。生徒がいきいきとでき、学ぶ楽しさを感じられる授業。理科嫌いをつくらない、理科が好きになるような授業をしたい。

生徒から教えてもらったこと

これまで約二万時間も授業を行ってきた。なんともすさまじい時間である。同じような内容を何度も教えてきた。でも、この二万時間の中に、うまくできた胸を張って言える授業は、どれほどあったろうか。うまくいかなかったとき、後味の悪さが残り、憂鬱な気分になる。次の授業こそと、何度思っただろうか。

それでも生徒の中には、こちらの気持ちを感じ取ってくれて、私に暖かいメッセージを送ってくれる。近頃ある生徒からももらった手紙に、遅ればせながら私はある発見をした。

「物理の授業、すごく楽しかったです。すごく難しい物理だけど、問題が解けるとすごい達成感だ。楽しい物理。なんで楽しいのかな」と思ったら、先生がすごく楽しそうに実験をやったりしているからだ!と思いました。」

どうしたらいい授業ができるか、永遠のテーマであると思ってきたが、その答えの一つを、その生徒から教えてもらった。私が楽しいと感じて授業をしているとき、生徒も共に楽しく感じている。そのときいい授業?ができているのかもしれない。

似たようなことを生徒に言われたことがある。「星の勉強は楽しい。先生、星の話になると、目が輝いているよ!」と。星が好きな私は、星や宇宙の話をしたりするとき、夢中になってしまいうらしい、そうかもしれない。いい授業、それはとても難しいテーマであるが、少しばかり答えが見つかったような気がする。教員生活も残りわずかとなったが、先輩の教えに感謝しつつ、これからも生徒たちと共に学び、成長していきたいものである。

## 数学教師として教壇に立つて

誕生したばかりの足利西高で、新採教員として昭和四十七年に教壇に立った。生徒たちは縦横関係の会社で働き、眠い目を擦りながらも学ぶ意欲に燃え、学ぶことに喜びを感じていた。そのような生徒たちとの六年間で多くのことを学び、教員としての原点を培った。今の自分があるのは同じ場所、同じ時間を共有した生徒、先輩や同僚の先生方との出会いがあったからだ。当手を振り返るといつも感謝の気持ちと懐かしさで一杯になる。

授業で「縦横十センチメートルの正方形の厚紙の四隅から、同じ大きさの正方形を切り取り、残りの部分を折り曲げて、ふたのない箱をつくる。このとき、この箱の容積の最大値を求めよ。」という問題を解くことがあった。中学生でも解けると話したことから授業が盛り上がった。厚紙で箱を造って四段重ねる。縦、横、高さの和が一定になる。これで最大値が求まる。三項の相加・相乗平均の不等式まで授業を展開することができた。しかし、問題を解くのに特殊な方法を探すのでなく、数Ⅱ、数Ⅲの微積の概念をしっかり学びなさいと付け加えた。

素数は面白い数である。「ある数が十一の倍数かどうかの判断は、一の位の数を十の位の数から引く。一の位はなくなつたものとする。これを繰り返して、0になれば十一の倍数になっている。」生徒と考えているが、七の倍数かどうかの判断で綺麗な方法が見つからずにいる。素数の話から始まり、フェルマーの小定理まで脱線し、暗号の話まで進む。十年以上もテレビ番組欄のGコードの解説ができそうで、できていないでいることを話し、解説のチャレンジを呼びかける。

情報教育に携わって二十年以上になる。ニューメディア、マルチメディア、ITと絆糸曲折しながら発展してきた。インターネットは役立つもので、便利さを感じる。しかし、携帯電話には、あれば便利だろうと思うが、なくても不便を感じない。キャッシュカードもなくて不便を感じない。生徒にコンピュータ犯罪や携帯電話のトラブルについて話すと、「持たない」という選択肢があることを強調する。

三年生の数学の授業の最後に話し続けていることがある。「数字を読むときに四桁でコンマを打つようにしませんか。」三桁でコンマを打てば英語読みするとき便利で、世界共通になっているが、日本語で大きな数を読むのには四桁ごとにコンマを打てば誰にも間違いないと読める。日本語は四桁ごとに読むようになってきているのだから。

突然に、東海道を歩いてみようと思ひ立ち実行している。電車でA地点まで出かけて、B地点まで歩く。B地点から電車で帰る。これを繰り返して京都に辿り着こうとする計画である。しかし、この計画が実行できるのは交通費が安上がりで済む青春十八切符が発売されている夏、冬、春に限られる。間近に見えている富士山は、一日歩いても見える方向に変化はない。田子の浦海岸から見た富士の高嶺の雪は素晴らしかったろうが現在の海岸には趣がない。川幅が広い川は大井川だけではない。疲れて歩いているとき声をかけられると元気が出る。歩道のない道路は沢山あり、車優先の社会を実感する。生徒に東海道を歩いている話をするところがある。話し終わって、「もし、困難に突き当たり、悩みや迷いが生まれたら、勇気を持って、体験の一步を踏み出してみませんか。」と聞いてみる。

## 授業に思うこと

「歳月人を持たず。」三十七年間の教員生活にピリオドを打つことになった今、後輩の先生方に伝えられる知恵をどれほど蓄積してきたか、自責の念にかられる思いです。

私は大学を卒業して一年間民間会社に勤めてから教師になり、新設校のS高校に赴任しました。授業以外に校務分掌があることなど全く知らず、毎日戸惑ってばかりいました。また数学を教えていましたが、授業を真面目に受けようとせず、注意をしてもいうことをきかない生徒も多く、どう指導してよいか分からず、授業に出ることに苦痛を感じていました。ある日の授業のときです。問題演習の机間指導をしていたとき、いつもふざけているA男が突然「先生、これでいいの？」と声をかけてきました。正解でした。「これあつてるよ。たいしたものだ。」と本心から応えてやると、目を輝かせて喜びました。彼が心の中で「できたぞ、やったあ。」と歓声を上げたかのように、私には思えました。このとき、教師を続けていけそうな気が湧いてきました。彼の笑顔は今でも忘れません。

授業がつまらない、分らないほど辛いことはない。つまらなければ寝るか、じゃまするか。しかし誰でも分かりたいという願望は持っている。だから分かった時はうれしい。五十分の授業をどうすれば飽きさせないか。これが授業に対する私の原点です。特に新しい単元の導入部では興味関心が湧く実験や操作活動を取り入れました。授業が教師の一方的な説明中心の講義でなく、生徒との質疑応答を繰り返すコミュニケーションの場（一種の劇場）になるよう工夫しました。しかし、十分教材研究をしてシナリオを用意して授業に臨んでも満足できる授業はなかなかできません。毎時間の指導案を作って授業をして、

授業後の反省をもとにまた指導案を作る。毎日PDCAサイクルを繰り返すことが、分かる授業を目指す基本だと思います。分らないのを生徒のせいにするわけにはいきません。

学力の向上の基本は言うまでもなく日々の授業の充実にあります。学校では公開授業・研究授業・授業参観等さまざまな対策をとって授業改善を図っていますが、最終的には教師本人の自覚と意欲にかかるとでしょう。経験上授業改善のために一番効果的だったのは、生徒に授業を評価してもらったことでした。生徒の率直な意見はハツとすることがあります。

よく「教師は授業で勝負する」と言われますが、授業の究極の目的は知識や解法テクニクを指導するばかりではありません。授業を通して生徒との信頼関係を構築して、一人ひとりに人間としての生き方を示すことです。授業の中に人間性がにじみ出てこそ、良い授業と言えます。時には、教科に対する熱い思いを話したり、感銘を受けた本を紹介したり、興味関心のあることや趣味のこと、そして人生観を話せるとよいでしょう。

教職二十年目研修の折、受講者の間で「今何やっているの？」「○○主任やっているよ」という会話を交わしているのをよく耳にしました。長い教師生活においては勤務校や年齢・経験などによって、いろいろな立場（校務分掌）を経験することになります。立場が人を作るとも言われますが、仕事が忙しくなるほど責任も重くなります。教科指導はもちろん、生徒指導、進路指導、学年経営等多方面にわたって資質や能力が求められます。しかし、これらの校務の合間に片手間で授業をしているとか、始業ベルがなってもいつも教室に遅れるなどでは本末転倒です。どんな立場になっても授業を大切に。

時を超えて



現在、皆さんが使用している職員コードが設定されたのは、私が学校事務職員として採用された年であることを今でも記憶しております。当時はまだ、コンピュータという言葉も知らなくて、計算といえばソロバンが主流でした。

給料計算・旅費計算は、手書きによりソロバンではじき出していた時でした。ソロバンができなくては何事もできないため、結構苦勞をしながらソロバンを練習してきたものでした。

その後、日本の高度経済成長と共に、学校内にもその波が押し寄せてきて、ガリ版での印刷、謄写ファックスと言ったものが姿を消し、コピー機や計算機等の導入により、事務のスピード化が求められるようになってきて、私たち学校事務職員も仕事が大きく変わっていきました。

さらに、IT機器が導入されて、それに対応する時間等に追われ、学校事務の求められる質も高くなり、量も増加してきたように思われます。

例えば、支払関係の支出に関しても、当時は地方出納事務所が設置されており、請求書・見積書・購入伺簿等を持参し審査を受けるシステムがとられていました。しかし、県の行政機構改革により地方出納事務所が廃止され、財務会計システムの導入により、支払事務・歳入管理事務等が学校裁量の拡大に伴い、事務量・予算執行等への責任と対応等が大きくなりました。さらに、公務員制度の改革に伴う人事評価システムの導入等、学校事務が大きく変化してきたここ二十年間ではなかったと思っております。

このような時代の変革ではあっても、人間関係はいつの時代でも変わりがありません。私が若かりし時に当時の事務長に、「事務室は学校の顔だよ。」と聞いた記憶があります。来校者が事務室の窓口にとられ、その対応の仕方、この学校に対する第一印象として与えるイメージが大きいと、窓口事務の重要性を植え込まれたように思います。

学校事務職員は、事務分掌によりそれぞれを担当しておりますが、忙しさの中にも事務室内での和を図り、コミュニケーションをとりながら仕事をしたい方が効率的ではないかと思っております。事務室内が明るい雰囲気であれば、先生方も入室しやすく、いろいろな仕事に関する相談、情報等がえられることにより、教育現場との意思疎通にもつながっていくものと思っております。

現在、学校を取り巻く環境も大きく変わろうとしております。

高校再編前期実行計画は四年目を迎え、二十二年度からは後期実行計画、学校教育法の改正により、盲・聾・養護学校から特別支援学校への転換など、事務職員としての職務遂行能力やマネジメント能力がますます求められてきております。自己研鑽に努めながら、事務処理能力を高め、校長を補佐して学校経営に関わりながら、教育活動の推進に取り組み、児童・生徒たちが勉強しやすい環境作りを心がけながら、事務処理をと願っております。

目まぐるしく変わる時代、健康にはくれぐれも気をつけて頑張っていたきたいと思います。

私は自ら物事を判断し決定するときに、「許容範囲」内かどうかを基準としている。どこまでが「許容範囲」かは分からないことが多く、人によっても判断が異なるし、時と場所によっても異なる。また一定せず流動的だ。分かるのはその範囲を超えて、事件となったりシステムが機能しなくなったときなのでやっかいだ。常に考えていないと気がつかなかったり、時期を逸したりする。「許容範囲」の概念は私たちを取り巻く自然環境、国家や地域社会、そして個人一人ひとりの中にある。ここでは長年進学校と呼ばれる学校に勤めていた経験から、気になっていたことを述べてみたいと思う。

共通一次試験およびセンター試験が実施されてから三十年ほどになろうとしている。実質的にセンター試験のみでも大学に合格できるようになってきて、高校での学習活動がセンター試験対策に偏る余り受験科目以外の科目をおろそかにしたり、カリキュラムの上でも受験科目に重点を置いた編成になってきた。特に生徒の意識がセンター試験の科目にのみ向いているように感じる。大学では入学後に専門の基礎的な分野で補講が必要となる現状に至っては、「許容範囲」を超えていると言つてよい。社会の変化、生徒の希望実現や保護者の要望などに対応した結果として今のシステムになったのだから、安易な批判はできないが、現在の高校教育は本来の目的や目指しているものに、その役割を充分に果たしているか、今一度立ち止まって検証してみる必要がある。私は高校および大学へ入学することにあまりにもエネルギーを使いすぎ、「許容範囲」を超えていると感じている。むしろ入学後の教育の充実を図ることにこそ、エネルギーを傾ける必要があると思う。

以下は実現しそうにない私の「戯言」である。

一、二学期は十日間早めて八月二十一日からとする。：授業時間を確保するために夏休み中に補習として実質的に授業を行っている現状ならば実状に合わせた方がよい。  
二、中学校から高校への推薦入学試験は廃止する。：授業日数を確保する。(高校の授業を犠牲にしてまで二回の入試は必要ない。)

三、大学入試センター試験について

- ・ 大学入学資格試験とし、科目を増やす。：高校での日々の学習活動が重要になる。
- ・ 標準単位以上履修習得した科目について二年次から受験可能とする。
- ・ 生徒の意識が前向きになると共に科目増大に対応できる。

四、大学では独自の個別試験を実施する。：センター試験の結果は可否の資料としない。  
大学独自の個別試験を四月入学と九月入学の二回とし、定員を割り振る。：生徒の受験の機会が二回になり、特に部活動等に取り組んでいた生徒に取っては納得のいく高校生を送ることができる。受験に失敗しても半年間の集中した受験勉強ですむ。

五、個別試験は私立大学は二月から、国公立大は三月中旬に実施する。：国公立大は一回のみ。生徒の受験機会が二回必要ならば二グループに分ける。

など、高校での実質的な授業日数を確保することによって、日々の学習活動の充実や学校行事などにより、高校の教育活動がさらに活性化されるシステムを模索したいものだ。私の「戯言」も議論の対象になればと密かに思っている。

## 特別支援教育の目指すもの

私が宇都宮大学の養護学校教員養成課程に入学したのは昭和四十三年でした。当時、県内には知的障害養護学校がなく、重い知的障害児は就学できませんでした。国はこのような状況を改善するために、大学に養護学校教員養成課程を設置して教員の養成を行うとともに、養護学校の義務制化（障害児の全員就学）を目指して、昭和四十八年までに知的障害養護学校の未設置県を解消することにしました。そのような中で、昭和四十九年に本県初の知的障害養護学校として、栃木養護学校が開校しました。また、国は昭和四十六年に国立特殊教育総合研究所、同四十八年に国立久里浜養護学校を設置して、義務制化以降に就学することが予想される重度重複障害児の教育方法を研究し、その成果を全国の盲・聾・養護学校に広めることにしました。本県でも義務制化に対応するために、知的障害養護学校を八校整備するとともに、特殊教育に関する研修や研究を行う拠点として、特殊教育センターを開設しました。私は、昭和五十年に栃木養護学校、同五十四年に久里浜養護学校、同五十九年から特殊教育センターの職員として、重度重複障害児や知的障害児の指導法の研究に携わりましたが、振り返ると、私は、教員として養護学校の義務制化という大きな流れの中を歩んできたのだと思います。

日本の特殊教育は、昭和五十四年の養護学校の義務制化以降、重度重複障害児の教育内容の改善充実と障害の多様化への対応を中心に発展してきました。本県の重度重複障害児に対する教育も年を追うごとに充実し、現在では医療的ケアの必要な子どもたちに対して、看護士も配置されるようになりました。障害の多様化への対応として、子どもたち一人ひ

とりに応じた個別の指導計画の作成も行われるようになりました。このように特殊教育は充実し、一人ひとりの発達を促す教育が手厚く行われるようになりましたが、最近私は自分への反省も込めて、「何か大切なものを忘れているのでは」という気持ちが強くなっています。それは、特別支援教育の目指すものは何かということです。

今、私はこの教育の目標を「子どもたちの社会性を伸ばして社会生活に参加させること」だと考えています。就職できる可能性がある子どもは、十二年間の教育を行うことよって自立を成し遂げることで、卒業の時点で就職することが難しい子どもは、福祉施設等の生活の中で、支援が少なくても生きていける力を身につけることが目標になります。人的環境を整えて個別的な教育を行うことは、子どもたちが社会参加できるようにするための手段です。大きな目標を忘れてしまうと、人的環境や施設設備などを整えることだけが目的化してしまいます。卒業後に、学校教育と同じ水準の手厚い人的支援が受けられることは考えられませんので、それまでに社会性を高めて、そのような環境の中で生きていける子どもたちを育てることが特別支援学校の使命です。国は平成十六年の「障害者基本法」の改正や、同十八年の「障害者自立支援法」の施行により、働く意欲や能力のある障害者の就労支援を充実させる方向を明示しましたが、教育についてもこの傾向は強まることが考えられます。

最後になりますが、自分への反省の気持ちを込めて、特別支援教育の普遍の目標は、「子どもたちの発達を促すことではなく、社会生活に参加させること」であることを、改めてお伝えしたいと思います。

昭和四十年年代の高度経済成長長期に県職員に採用され、今日まで馬蹄を重ねて参りました。四十年代後半のオイルショック、その後のバブル期を経て長い経済不況に入り、いまだその波から脱却できず、社会はその波に巻き込まれて、我々の生活も学校教育も大きく変貌を繰り返し、価値観も倫理観も多様化する傾向にあります。

学校もその例外ではなく、私が執務する事務室も大きく様変わりをしてきました。従来はそろばんやガリ版を用いて事務処理を行い、給与事務、旅費事務、収入・支出事務等すべて手作業で処理し、いまでは考えられないような膨大な計算処理がありました。支出をする際も、校長が決裁した支出書類を当時の地方出納事務所に持参して審査を受けた後に支出する制度になっていました。また、高等学校の事務室では授業料等を窓口で徴収していた関係で、毎日多くの現金を収納して口座ごとに仕分けして金融機関に持参した時代もありました。

今では、全庁的にOA化が充実して、事務職員の机上には全員ノートパソコンが置かれ、ネットワークシステムにより効率的に事務執行が行われています。授業料の徴収、物品購入、財産管理、給与、旅費事務においてもそれぞれのシステムが構築されて基本的には基礎データを入力することにより自動計算され、その確認作業をするようになっていきます。また、私の職務のひとつである出納員については、出納事務所の廃止により、充て職の私とその事務を行っています、これも以前にはなかったことです。それほど時代は急速に変化していて、そのすう勢は、二十一世紀に入った今もとどまることなく変貌しつつあ

ります。

しかし、そんな中にあっても視点を変えれば、どのように時代が変わっても、世の中の考え方が多様化しても、社会にしっかりと受け継がれ、はぐくみ培われていくものがあります。「人と人が直接言葉を交わしあい・語りあい、相手の意見を傾聴し、自分の思いや考えを正しく伝え、納得して理解しあうこと」、それがあるからこそ、お互いの信頼関係が構築され、地に足のついた仕事ができるものと信じております。さりとて、相手の意見を素直に聞いて、その思いや考え方を正しく理解することは、なかなか難しいものであると感じています。毎日が勉強です。毎日が真剣です。

今、学校は地域に開かれた学校をめざしています。ともあれ、従来閉鎖性を指摘されてきたこともありましたが、学校は学習指導を行う教育機関であると同時に、視点を変えれば一つのサービス機関であると考えます。その運営の基本には「顧客満足度」の考えがあり、地域の方々や保護者の方々と共に開かれた学校づくりを展開して、生徒や保護者の期待にどう応え、満足頂けるかを考慮することが求められています。また、学校の在りようについての説明責任も求められています。学校が確かな時代認識を持ち、新たな状況に積極的に対応するため、財務面において校長の指揮監督を受け、学校に勤務する事務職員として県予算の厳しい中ではありますが、学校のため・生徒のため、より良い教育環境の実現に向けて努力するつもりです。そのためには、教育職の先生方と堅固な信頼関係を築き、共に同じ目的を達成するために地道な実践をしていく他に、道はないものと考えます。

## 生徒との日々の対応を大切に

期待と不安を抱えて、初任校の門をくぐってから三十数年、もうそんなに経ったのかと感じる反面、さまざまな思いが頭をよぎります。希望を実現して巣立った生徒、途中で挫折して去っていった生徒、何かを抱えて保健室を訪れた生徒一人ひとりに対してきちんと向き合えていたのでしょうか。振り返ってみると課題山積といったところです。私は、何の実績もなく、説得力のある言葉も思い浮かびませんが、残りわずかな仕事の総点検を兼ねて、気持ちを新たに、これまで自分の心掛けてきたことを振り返ってみます。

私は、養護教諭の広範な職務の中で、基本となる必須の部分を適切に行うことを常に自分の中心に置いてきました。そうすることに、自己満足ではありますが、執務に落ち着いて取り組むことができました。また、多忙な職務の中で、勿論「今、自分は何を優先してやるべきか」を考えますが、まずは、目の前にいる生徒たちへの対応にかかわり、後で、事務処理に追われています。自分の信念と現実とのギャップに心が揺れることが多々ありますが、後悔しないために、生徒との日々の対応を大切にすることを第一に心掛けています。悩める子どもたちの声を聴き、少し支えて、待つ。悩みは様々ですが、同じ繰り返しが続きます。その時その時に、自分ができることを精一杯やる、これを継続していくしかないかなと思っています。複数配置の学校もありますが、まだ大半の学校は一人一人です。仲間を支え合い、問題解決のために知恵を出し合い、お互いに高め合えるような養護教諭間の連携を大切にしています。日頃の悩みを話し、励まし合うことで気持ちが楽になりますし、他校との情報交換により職務がスムーズに実施でき、意欲が高まります。困

った時に相談できる、協力してくれる人間関係を学校の内外に作っておくことが必要だと思います。また、養護教諭は、学校の中の組織の一員です。困難な問題に突き当たった場合には一人で抱え込まずに、周囲の先生方のサポートを得て問題解決にあたっています。

慌ただしい執務の中でも、得たことはたくさんあります。仕事を通して、多くの人と出会い、教えられ、支えられて、今日の私があると感じています。長年勤めていると、職場で生徒の成長した姿に出会えます。教え子ですと言ってくれる先生、親子二代お世話になりましたと挨拶をしてくれる保護者、同じ仕事を選びましたという養護教諭の先生、過ぎ去った歳月を思い、再びの出会いに感動です。人間の健やかな成長にかかわれる仕事に就いている喜びを感じるひと時です。また最近では、生徒の言動に力づけられている自分に気づき思わず苦笑しながらも、喜んでいきます。

時の流れに伴い、社会環境は複雑化し、様々な問題行動が生じています。私たち養護教諭の役割も、社会の変化・健康問題の変化により、多種多様になり、その果たす役割に期待が高まっています。より高い資質が求められ、目の前にいる子どもたちの心と体、両面の健康問題を的確にとらえる力量や、解決のための指導力が必要とされています。子どもたちの健康を守り育て、生涯にわたる心豊かにたくましく生きる力をはぐくむという、役割の大きさを痛感しています。

私は、奇しくも、第一回栃木県養護教諭部会が開催された昭和二十四年に生まれました。多くの先輩方のご尽力により養護教諭の礎が築かれ、今日があることに感謝しております。

## 事務職員として

私が事務職員として採用になった昭和四十年代、給与事務や旅費の計算等はそろばんを使い、書類等で控を残す場合はカーボン紙を間に挟みボールペンで書きました。職員室では、ガリ版の上からろう原紙を載せ、鉄筆でガリガリと音をたてながらテスト問題や文書を作成し、謄写版で印刷をしていました。また、休憩時間になると多くの先生が一箇所に集まり、授業や部活動、趣味などの話で盛り上がっていたことなどが思い出されます。今ではそのような光景は見られなくなり、時間の流れ、月日の経過が年々早くなってきているように感じられます。

急速な高度経済成長により、学校の様子も大きく変わりました。施設や環境の整備が随って教育活動がしやすくなり、設備に関しても最新機器を導入する等、生徒一人ひとりに目を向けたきめ細かな教育がなされています。そして、多種多様なＩＴ機器等の教材を利用した教育を展開している今日、多くの情報をいつでもだれでも容易に得ることが出来る情報化社会も一緒にやって来しました。また、生徒、保護者、教職員個人の情報管理に配慮することが大変重要になってきたことに伴い、「個人情報保護」の必要性から、諸基準・規程が策定されてきました。まず、平成十年九月一日に、事務の執行に当たつての「栃木県個人情報取扱事務委託基準」が作成され、取扱いについての事項が示されました。次に、平成十五年四月には、情報セキュリティに関する基本的な考え方と対策の基準をまとめた、「栃木県情報セキュリティポリシー」が策定されました。

私も学校事務として、パソコンの導入や校内LAN、そして県立学校間情報ネットワーク

クの整備等と共に、情報の取扱いに関連した設計書及び契約書作成等、情報セキュリティ関係の事務処理に多く携わるようになってきました。今後ますます多くの情報が行き交う中、文書が机上に積まれますので、個人情報に関する取扱いは、特に慎重かつ安全に活用していく必要があります。この「情報の適正管理」を全職員共通課題とし、正しい「文書事務取扱い」の意識を持続していくことが大切だと考えます。

いつ、何処で、何が起こるか分からない時代となり、全国の学校では、生徒に関わる事件・事故が続いています。学校で事故が起きると教育活動に多大な影響をあたえることは言うまでもありません。従って事故を未然に防止する「危機管理」体制が大切になってきています。講演会で、「危機管理で重要なことは、知識や制度ではなく『意識』であり、危機管理意識があつて初めて『知識』が生きてくる」という話をうかがい、事務職員として日ごろから意識を持って仕事に当たる大切さを改めて認識させられました。

今、「最悪を想い・慎重かつ・素早く・誠意を持って・組織で対応する」を基本的な心構えとし「危機管理マニュアル」等を作成して全職員で共有化し、素早い対応で危機を未然に防止する体制を確立しているところです。また、全校に自動対外式徐細動器を設置し、職員全員が心肺蘇生法講習を受講するなど、生徒の健康を管理する体制も整ってきています。「情報管理」・「危機管理」いずれも生徒の安全を守る重要な問題であり、生徒が事故に遭わない、事故を起こさないを目標に、私たち事務職員は創意・工夫をしながら、積極的に教員と連携し、環境を整備していくことが重要な責務と考えています。

## 養護教諭として四十年間過ぎてみて

今思うと無事定年を迎えられて本当に幸せだったと思います。原稿依頼のあった頃、テレビでは学校で転んで半身不随になった児童のことが取り上げられていました。

『授業中、ある児童の具合が悪くなり、担任が保健室に運んだが、大変不幸な事故で原因がはっきりしなかった。保健室には来室者も多く、頭部打撲の別の児童もいたため、養護教諭はその児童を何時間かそのままにしていたという。児童は救急車を呼んですぐ保健室に救急車を呼んだが、保護者が呼ばれたという。保護者は、体が動かない児童を見てすぐに保健室に救急車を呼んだが、後遺症が残って現在も歩けず、障害者施設に入所しており、介助なしには食事もできないという。確かに内容は発見が難しく、負傷した児童は気の毒であるが、転倒だけで脊椎損傷が起きたとは考えにくいところもある。しかし、養護教諭と保護者の校長室でのやり取りの録音テープでは、養護教諭の激しい言葉と自分は悪くないという主張に私はいたたまれない思いがした。以前に他の児童の事故で救急車を呼んだら病院で注意を受けたので、救急車は呼べない」と養護教諭は主張していた。』この事件をとおして、児童、保護者の主張はどうして苦しいときに分かってくれなかったのかと言っているようにした。不足していたのは、医学的に判断する力と児童の主張に耳と心を傾けることと、同僚の応援を頼むことだったのではないかと思います。

養護教諭は学校に一人職（二人制もあり）ということもあり、養護教諭の立場から主張しなければならぬ事もあります。相手と良いコミュニケーションを築くことができているれば、理解され意見や主張がスムーズに受け入れられます。ちよつと頼める関係も大切

です。学校内にあつて養護教諭は生徒や保護者のみならず、上司や同僚にも安定した安全環境を保証できる一員でありたいものです。専門的な知的向上と共に、相手に余裕を持って相対できるように、人間的にも向上していきたいものです。これは養護教諭だけでなく教職員は誰でも心がけるべきだと思います。先生方は、生徒に対して円満にスムーズに指導できている場合がほとんどだと思いますが、担任の先生にしても養護教諭にしても、生徒との関係に緊張状態が生じた場合は、心して「これは大切だ」と思うべきです。努めて冷静に、余裕を持って相手の言い分を充分聞くことです。相手の言い分を良く聞くことは、相手を理解する上で大切であるだけでなく、問題の解決につながる場合が多いものです。以上、私なりの意見を述べてみました。少しでも参考になる部分があつたら幸いです。

最後に、私はなぜ四十年間養護教諭を続けることができたか。それは四十数年前には養護教諭が足りなかつたためです。大学でも養成課程がほとんどありませんでした。栃木県教育委員会が栃木県立養護教諭養成所を宇都宮大学につくつてくれて、私は二期生です。養成は二年間でした。初めのころはコンプレックスもあり、日本女子大学の通信教育で養

護教諭一級の教員免許を取りました。ずっと栃木県にいるつもりが、夫の転勤で東京に七年間住むことになりました。そこで私は埼玉県の採用試験を受け、埼玉県立志木高校、和光高校に勤めました。その後、再度栃木県の教員採用試験を受けなおしましたが、受験者が多くなり時代を感じました。いろいろな体験をさせてくれた養護教諭という職業でした。どうぞ皆様の学校における生活が、生徒を含め楽しく有意義でありますようお願いして、ペンを置かせていただきます。

## 寄宿舎教育の変遷に思う

寄宿舎は「遠距離のため通学困難な児童生徒のために設置」されている。

昭和四十八年、私は「寮母」として教職生活をスタートした。その当時は名称「指導員」でなく「寮母」であった。「寮母さん」と呼ばれ、児童生徒の面倒さえ見ていけば良いとされ、寄宿舎教育は障害児校の教職員にさえ理解されていないと感じることもあった。また女性の職場とされ、男性職員の採用は初めての時代でもあった。

昭和五十四年から養護学校に義務制が施行されてからは、寄宿舎の果たす機能は、集団生活しながら主に基本的生活習慣を身につける場、将来の社会的な自立のための場であるとして、その役割を担ってきた。

平成十四年四月から、施行された、学校教育法寄宿舎指導員(第七十三条の三)盲学校、聾学校、養護学校の寄宿舎の「寮母」の名称を、男女共同参画の形成の促進の観点から「寄宿舎指導員」に変更にするともに、その職務内容を「養育に従事する」から「日常生活及び生活指導に従事する」とした。同時に寄宿舎機能も「集団生活：」から、個人の生活能力の実態を把握して、個別の指導目標を設定し専門的知識及び具体的な指導方法を、取り入れて個々に応じた指導・支援へと変容している。左記のような項目をそれぞれの指導員が考えて実践してほしい。

①「専門的知識及び具体的な指導方法」の文言が良く使用されるが、専門的とは何か考えてほしい。

②「児童生徒の障害及び病名」を学んでほしい。

③毎年栃木県保健福祉部障害福祉課発行の「障害者福祉ガイド」は障害福祉施策の全般について、浅く広くわかりやすく取りまとめているので活用してほしい。

④この分野については、他の職員よりも自分の方が詳しいと自負するものを持つてほしい。  
⑤卒業後の社会的な自立に向けた(職業教育)指導等も、今まで以上に寄宿舎に強く求められてくるだろう。就労を目指すために寄宿舎に入舎する生徒のためにも、障害者の就労支援の「障害者自立支援法」(措置制度から契約制度への変容)を浅く広く学んでほしい。

障害についての専門的な知識や福祉全般についての認識を持って指導・支援にあたること、児童生徒の将来を見据えた真の生活指導ではないかと思う。

平成十九年度より、現場からの呼びかけにより、全県下の寄宿舎関係職員が一同に会し、「寄宿舎教育実践研究協議会」を立ち上げたことは画期的なことである。今後、毎年夏休みに研究協議会を開催することにより、指導員の資質向上と各校寄宿舎の今後の方向性(新しい寄宿舎創り)が生まれことを期待する。

一所懸命やれば知恵が出る

中途半端だと愚痴が出る

やる気なければ言い訳ばかりする

## 教育成果の検証

わが国が高度経済成長期に入った昭和四十七年に、高校の数学教員として新規採用となり、真岡高校に赴任しました。真岡は初めての土地でしたが、工業団地の造成によって、周辺の道路が整備され、デパートやスーパーが真岡駅周辺に相次いで開店し、活気にあふれた様相を呈していました。人の交流が活発になることで、勢いは学校にも持ち込まれ、地元生徒とともに関西や九州方面から転勤された工場関係者の生徒も通学しており、勉学や進路の選択で大きな刺激を受けました。こちらに転校するとき、「高校卒業後に、赤門で会おう」と約束してきたことを公言する生徒もいて、地元出身生徒のプライドをくすぐり、自然と対抗意識に目覚めることとなりました。

指導力の未熟な新米教師にとって、生徒たちの熱い思いに応えるのは難しいことです。高いレベルの授業を意識して、つい自分の専門である知識を一方的に話してしまつて後悔することもあります。このような独断による一方通行の授業から、わかりやすく、教材への興味が深まる指導をめざして、何度も研究授業を公開し、自分も生徒も納得のいくように努めました。また、県の教育研修センターが企画した中・高数学研修にも毎回参加させていただき、県内各地区の授業を参観して、自分の授業に反映させるようになりました。

四半世紀の時が流れて、新採として勤めた真岡高校の校長として再び勤務することになりました。多くの教え子たちが保護者となり、「先生、今度は子どもたちの指導をよろしくお願いします。」と温かく迎えてくれました。そして、進学指導に関わつた教え子たちの多くが自分と同じ教職の道に進んでおり、地域内の子どもたちの教育にあたっている

姿を見ることができ、うれしくなりました。自分の歩んだ道は、教育の仕事を押し付けるような指導でなかつたかと反省しているところですが、先生にできる仕事を自分も挑戦してみようという意欲を引き出せたのではないかとも思っています。

教職生活十八年目の平成元年に、母校である宇都宮高校に勤務することになりました。歴史と伝統のある進学校であり、教科書の範囲を超えた高いレベルの授業を展開することが求められ、自分の高校時代のことや教職経験を踏まえてもプレッシャーのかかる責任の重さを覚悟しなければなりません。赴任早々、授業が終わると直ぐに、大学入試レベルの難問が寄せられ、教員としての品定めとなる質問攻めを受けました。そのときの応答の基本となるのは新採のときから心がけていた、わかりやすく明快な考え方を示すことであり、一時の通過儀式が済んだかのごとく質問の回数も落ち着くようになり、生徒たちの評価も定まつたようです。

この四月、青春時代を過ごし、数学の教員として勤めた宇都宮高校に、校長として赴任しました。高校卒業後四十年、教員勤務二十年後の節目に、創立百三十周年記念式典の行われる母校に勤務できることは、教師冥利につきるといつても過言ではありません。これまで、教育現場を離れた教育行政や教員研修の仕事にも携わってきました。教育成果の検証はむずかしいと言われますが、二度にわたる真岡・宇都宮高校での貴重な経験を生かした教育活動を行っていきたいと考えています。

# 教育への姿勢



## 生徒のために何ができるかを問え

アメリカのケネディ大統領の就任演説に有名な言葉がある。"Ask not what your country can do for you. Ask what you can do for your country." ("祖国が君のために何をしてくれるかを問うな。君が祖国のために何ができるかを問え。")——若き大統領の簡潔で力強いこの言葉に発奮し、困難な課題に挑戦する勇気を得た人が多いという。別に「祖国」でなくてもよい。「人が自分のために何をできるかを問え。」と読みかえてもいいし、「人は義のために生きるべきだ。持てる力の全てを注いで自分にとっての課題に取り組め。」と読みかえてもいい。そして私は、教師なら"Ask what you can do for your students." ("君が生徒のために何ができるかを問え。")と読みかえたいと思う。これまでの職場で、私の周囲にも、そういう真摯な姿勢で仕事に臨んでいる教師が確実にいた。

人のために何かをできる、ということとは実はとても幸せなことだ。それが、仕事で直接顔を合わせている将来性のある生徒に對してできる、というのだから、こんな恵まれた職業はない。しかし、私も最初からそう思っていたわけではない。昔は、日々授業やHRの生徒たちと格闘している感じで、無我夢中だった。自分の至らなさ、非力感に打ちのめされ、心に余裕がなかった。担任は大変だ、できればしたくないというのが本音だった。それが「生涯一担任を希望」と本気で願う人間になろうとは夢にも思わなかった。それは経験が私を育てたのだ。担任として生徒たちと密度の濃い人間関係を構築しながら三年間を過ごす——時には私という人間の全人格が問われる。生徒と対決する場面もある。これで

いいのか、この判断は的確かと悩み、考えに考え、生徒に心情を吐露し、私なりの信念を語りかける。生徒が真剣に受け止める、あるいは反発する。一生の岐路に立つ進路選択で、自己実現を目指す生徒の闘いに戦友として寄り添う。そんなことを繰り返しながらついに卒業の日を迎える。——生徒たちの成長を目の当たりにし、教えられたことの多い日々を振り返る。そして気づく。自分も成長できた。充実した日々が過ぎ去った。——いつのまにか生徒に對して心を開き、正面切つて対峙するようになっていた。「逃げ」の姿勢がなくなっていたのだ。若い頃はまだ教師としての矜持・覚悟といったようなものができていなかったように思う。あるいはそれは長く続けることによって醸成されてくるのかもしれない。自分はプロの教師だ、生徒のために、よりよい授業のために、できることは何でもする、という気概を持つようになっていた。

また、教師なら多くは身をもって知っていることと思うが、勉強は楽しい。生徒に教えるために、教材研究をするのももちろんのこと、修学旅行、HR、進路指導などで勉強することは山ほどある。調べていくうちにさらに好奇心が出てきて次々と範囲を広げ、勉強の奥深さ、楽しさを知る。人間的教養を深めるために読書も必須だ。そしてアウトプットする場がある、というのが教師の特権だ。だから沢山インプットして沢山アウトプットしたいと思う。また年を重ね、長年の経験や思索を経て、自分なりの信念や哲学のようものが形成されていく。それを次代を担う生徒に伝えていきたいと思うようになった。理想を、信念をみなさんも是非語ってほしいと思う。時間には限りがあるのだから。

新探校で指導内容・方法の研究を自分なりに重ね、教科を教えることにある程度の自信を身につけたと自負していた。ところが、二番目の高校に異動して早々、社会科学科研究授業において先輩の先生から「教え方が浅く内容が乏しい。スピードも遅い。」との指摘を受け、大きなショックを受けた。新任校は進学校であり、相当の覚悟をもって異動したはずであったが、考えが甘かったと言える。自信はもろくも崩れ、力不足を痛感した。

しかし、ここでたじろぐわけにはいかない。頑張るしかない。まず、指導内容をさまざまに点検し、必要と思われる教材は例え細かくも取り入れるようにした。教科指導書ではなく、歴史専門書にあたって勉強した。教える内容が細かく豊富になれば、進度が不安であるが、チャイムが鳴る前に教室に行き、チャイムからチャイムまで必死に授業した。また、板書・授業展開もスピーディーになるよう努めた。もともと重視したことは、教科内の先生方に謙虚に教える請うことであった。先輩の先生からは、「こんなことも教えないのか。」との厳しい言葉もあつたが、問えば必ず丁寧に教えてくれた。問うは一時の恥である。同輩の先生方に分らないことを問うこともあり、一緒になつて考えてくれたのが有り難かった。後に先輩の先生から「力が付いてきたな。」と評価された時はとても嬉しかった。

授業だけでなく、テスト問題に対する取り組みも大変であつた。出題は必ずオリジナルで、事前に担当者が集まつて出題内容の検討会を開き、基礎から応用まで何度も練り直して出題するのである。また採点した答案は、必ずテスト後の最初の授業で返却しなければならぬ。自作問題を検討会において加除訂正される度に、一歩ずつ良問作成ができるようになった気がした。

この高校では、「自ら学ぼうとする人間だけが教えることができる。」という雰囲気職員の間で満ち、一種さわやかな緊張感が漂っていた。空き時間には、自らの専門性を高めようとして、読書や問題を解く姿があちこちに見られた。一時間の授業のために、その何倍かの時間をかけて準備することが必要だと言われたが、正しくその通りであつた。

部活動では野球部を持った。自らの野球経験がなく、監督・部長として試行錯誤の連続であつた。野球専門書の知識もさることながら、周囲からのアドバイスは素直に受け止め、指導に反映した。野球に携わつての最大の収穫は、生徒との人間的触れあいであるが、一方で、他校の顧問の先生方と幅広く知り合うことが財産となつた。授業も部活動も、この高校での経験がその後の教員生活の土台となつたといつても過言ではない。振り返ると、長年の教員生活の中で、実に多くの先生方に出会い、自らが学ぶ存在であるという自覚のもと、良いところを謙虚に取り入れようとして努力してきた。問えば必ず丁寧な答えてくれる先生方に恵まれたことは幸いであつた。

ただ、謙虚さというのは、一面、控えめで消極的なニュアンスがある。自分の考え、信念を出さず、受け身に回つてしまうこともあり得る。私の部屋に、ある先輩からいただいた『和而不同』(『論語』)の額が飾つてある。「人と争わず、協調するのもよいが、自分の考えをしつかり持ち、毅然とした態度を示すことも大事だ。安易に妥協したり、調子を合わせるな。」との戒めの意味が込められているのだと思ひ、心の支えとしている。

## 教育行政と学校の現場

本年で三十七年間の教員生活に一区切りを迎える。その間、学校での勤務が十八年、大学院派遣が二年、行政勤務が十七年と、気が付くと教育現場との勤務年数が半々になってしまっていた。具体的には、教諭として塩谷高、鹿沼高、宇都宮東高の三校、校長として今市高、宇都宮南高の二校、県体育館、県国体事務局、県教委事務局勤務である。

教員を目指していた学生時代は、教科指導、生徒指導と生徒と一緒に汗を流す「先生」の姿を頭に浮かべていたが、教員六年目には、一日中、机に向かっている時間が多い勤務を経験することになった。もちろん生徒の顔はない。

しかし、この行政勤務の中で新しいことを実感することになる。教育は、国や県全体の施策の中で進められるとともに、そのための予算、人、施設等の裏付けの上に成り立っており、直接生徒と接する者だけで現場の教育は動いていてのではないことを再認識した。

学習指導要領の範囲内であれば、どう指導するかは現場の教員に任されており、その責任は重い。そこで、国がどういう方向性を持つて要領を改訂したのか、また、その施策を執行するための企画や予算確保の経緯などにまで目を向けておくことが、生徒の生涯を見据えた教育の実践のためにも、大切なのである。

行政の組織は、課長以下ピラミッド式に組織され、担当する事務分掌もはっきり決められている。担当する業務を熟知した上で、上司の命を受け執行することになり、他の分掌

については直接対応することは少ない。

しかし、学校の教員は違う。校長、教頭の管理職の元で教科指導とともに校務分掌による係分担が決められているが、実際に生徒の前では、教科指導はもとより学校での生活全般、更には家庭での生活指導にまで及ぶことがあるように守備範囲は広い。見方を変えると、いつも生徒の目の中で生活している。この違いを行政の経験をとおして改めて知ることになった。

それでは、我々教員はどのような生き方が望ましいのだろうか。振り返って今思うことを述べておきたい。

小さい子どもの頃と違って、高校生になると、「先生」には全人的なものを期待していない。確かに、我々の年齢になっても心に残っている恩師は、人として興味を持てるいい意味で「くせ」のある人物である。これが、魅力なのである。

「先生」は、カッコをつけずに人として自然体でいるのがいい。その先生の生きざまを生徒が見て、何かを感じ取ってもらえればいいのかも知れない。その場でなくても年月が経た後でも。そのためには、時には、喜怒哀楽を生徒の前で表すことも必要である。生きざまをさらけ出すことは、瞬間瞬間を真剣に生きる姿勢を持つことである。本気で物事に取り組む姿勢が生徒の心に映ってくれると信じている。

四十年近くも前のことである。恥ずかしながら、当時私は所謂デモシカ先生の類であった。だが、その軽薄さは、最初の赴任先である聾学校で見事に吹き消された。そうしてくださったのは、當時の子どもたちと先輩の先生方である。

教室を不意に飛び出し、壁に激突するまで廊下を突っ走る、ヘッドギアを装着した子。手首を四六時中しゃぶり、胼胝ができ化膿している子。精神的に不安定になると奇声を発し、興奮して大きくジャンプを繰り返す子。聴覚障害だけでなく他の障害を併せもつ重複学級の子どもたちであった。

こうした重いハンディキャップを背負う子どもたちに、先生方は精一杯の愛情を注ぎ、細心の注意を払いながら、人として強く生き抜く術を必死で教えていた。それこそ、機能訓練を含め、食事の仕方から、コミュニケーションの方法、衣服の着脱、パンツの上げ下げ、排泄にいたるまでである。

繰り返しの地道な指導が、日々続けられた。根気のいる大変な仕事である。だが、先生方は、昨日より今日、今日よりは明日の成長を信じひたすら続けた。何故なら、そのことが子どもたちの明日（命）を支える重要な仕事であることを十分承知していたからである。先生方の見据える先には明確に子どもたちの明日（命）があった。毎日が真剣勝負であった。子どもたちも精一杯それに応えようとしていた。そして、少しでも出来るようになる、その喜びを子どもたちと分かち合っていた。新米教師の私にとっては全てが衝撃的であった。

私は何時しか、子どもたちについて、また教師についてこう考えるようになった。「子どもは、誰しも常に成長を願っている。口には出さないが、心の奥底で必ず思っている。教師の役割は素直にそれに応えることである。」それは、デモシカ先生からの脱却であり、確かな教師の仕事を自覚する第一歩であった。

私が現在勤務している専門学校では、朝の打合せ時に社団法人倫理研究所発行の『職場の教養』を毎日読み上げている。二〇〇八年六月号に次のような話が載っていた。

『ある村に石を積み上げる仕事をしているA・B・C三人がいました。通りかかった人がそれぞれに「何をしているのですか?」と尋ねると、Aさんは「見ればわかるだろう、これで生活しているんだよ」と吐き捨てるように答え、Bさんは「寺院を造っているのさ」と邪魔くさそうに答え、Cさんは「ここに人の心を癒すための寺院を造っています」と目を輝かせて答えました。三者三様の答えに、尋ねた人は「同じ仕事をしているようですが、出来上がりは、かなり違うものになるだろう」と思ったそうです。「石を積み上げる」という一見共通の行為ですが、「生活の糧のため」「寺院を造る為」「人の心を癒す為」と、見据えている目的が異なると、仕事の成果にも違いをもたらします。・・・』

この話は、私たちに改めて仕事に取り組む姿勢の大切さを教えている。教師の仕事は人づくりである。同じ仕事をしているようでも見据えているものが異なると成果（人づくり）にも大きな違いが生じてくる。何のための教師か、何の為の仕事か、青臭いことと思わず常に自分に問い続けていって頂きたい。そして、人に「何の為に仕事をしているのですか?」と尋ねられた時、胸を張り目を輝かせて答えられる教師であって欲しい。

## 感謝

私は、昭和四十五年に保健体育の新採教員として足利工業高等学校に赴任し、この春に宇都宮中央女子高等学校を最後に定年退職致しました。ようやく自由の身となった今年の夏は、民族、宗教、人権、環境など様々な問題を国際社会に提起しながら開催された北京オリンピックを毎夜半までテレビ観戦し、何十年か振りに翌日のことは何も考えず、興奮冷め遣らぬ状態で過ごしました。異常に派手な開会式で始まった四年に一度のオリンピックは、過剰なメディアの報道によって多分に脚色されていた面はあるものの、国を代表する選手一人ひとりの真剣な姿によって、勝っても負けても多くの人に感銘を与え、世界中の人々が国を越えて応援し、スローガンである「一つの世界、一つの夢」を体感したのではないかと推測しております。この中で私の心に残ったのは、メダリストたちの「周りの人への感謝」と言う言葉でした。初出場の選手は勿論、二度、三度と回を重ねる選手ほど精神的肉体的プレッシャーは我々が想像する以上です。四年に一度の挑戦、そしていやが上にもマスコミや周囲に注目され続ける四年間、この重圧は私どもには計り知れないものであり、「感謝」なくしては過ごせぬ日々だったのではないかと思います。彼らの努力を無に帰さないためにも無事オリンピックが閉会することを心から願っております。

本題に戻りますが教員生活三十八年間、私は「生徒のために何をやるか」という一点で行動したつもりですが、果たして何処まで出来たか反省しきりです。私の生涯の座右の銘である、

「憂きことの上になほ積もれかし 限りある身の 力ためさん」

を子どもたちを導く上でよく引用しました。信条の割には私自身はいつも七十パーセント位の取り組みで、生徒たちには常に百パーセントを要求していたようです。あの時私ももう少し熱心であればと様々な場面を思い起こしますが、それでもめげずについてきてくれた生徒たちとは、今でも有難くお付き合いさせていただいており、本当に教師冥利につきる教員生活でした。四十代の後半に「少欲知足」と言う教えを知って、自分でもようやく「生徒のために」百パーセント近く行動できるようになった気がします。教職という仕事自体、社会的信頼と尊敬を受け、同時に責任と誘惑や葛藤との闘いであることも事実です。個人的な欲を少なく心身ともにクリーンな状態で、自分自身を戒めながら教員生活を送る事がいかに難しいかご承知の通りですが、私自身は何とかその様に行動できたのは、定年退職を迎えるまでの僅か十年だったと思います。

私の教員生活は文字通り生徒と共に学びながらの三十八年間でしたが、振り返れば生徒はもとより、無理難題を言いながらもいつも快く支えてくれた職場の方々、そして職場優先の仕事を、良いときも悪いときも不満一つ漏らさず黙って支えてくれた家族のお陰であり、「感謝」以外の何ものでもありません。それは四年に一度のオリンピックとは比べものにならない「周りの人への感謝」の気持ちなくしては在り得なかったのではないのでしょうか。その上で気高く、誇りを持って教員生活を送る事が、結果として「生徒のために何をやるか」に繋がるのではないのでしょうか。

## 人は認めてくれる人を認める

長年教師を務めていると肝心なことを忘れてしまうものです。だいぶ前になりますが、親族が集まった宴席で教育の話になり、「生徒はみんな先生が好きなんだよ」という言葉が義兄の口から衝いて出ました。それを意外と思ったのか「ハッ」とした自分を今でも覚えていてます。指導し評価する教師と指導され評価される生徒との間のまるで仇敵にも似た関係に浸かっている自分にとって、その素朴な言葉がなぜか新鮮なものに映ったからです。

教師として定年を迎える年で「生徒は先生が好き、先生も生徒が好き」と思い直しても気恥ずかしい想いもあります。これこそ、学校教育の原点であるが今更ながら思っています。しかしながら、現場では教師が生徒を好きにならない不幸な状況があります。勉強や生活のことで叱責してくれる先生が大好きですという生徒はいません。子どもの不甲斐なさに腹を立て、その不満の矛先を教師に向ける親もいます。子どももそれに乗じて親と一緒に教師を批判したりします。批判される教師も人間であり感情の動物ということですよ。

私の最初の赴任校は馬頭高校でありました。生徒から「お祭りだけ、家に来てくんない」と言われて行ってみました。郷土料理を戴きながら、私は「生徒はイイ、馬頭はイイ」と誉めちぎっていました。後日、生徒から「先生はイイ先生だけ、オヤジがまた来てくれやと言ってたよ」との言付けがありました。私もイイ先生になろうと思っていたところに、いとも簡単にイイ先生と言われて気分爽快でありました。今になって思い出すに、それは「生徒はイイ」を連発した効果から、新米教師ながら生徒を認め生徒を大切にしてくれる先生であると親の目に映っただけのことで、次の赴任校の足利商業高校では、問題行動

が多く半ば教師間では見捨てられていた生徒がいました。その生徒と廊下ですれ違った際に「頑張っているか？進路は決まったか？」と何気なく声をかけると、怪訝な顔をしていました。その日の朝も当該生徒の問題行動が職員室で話題になっていました。翌々日の夜、担任でもない私の家に髪を振り乱した母親が突然訪ねて来ました。訪問の理由は、「誰からも無視されている我が子に、先生から声を掛けて頂いて本当に救われました」ということでありました。そして、私に手を合わせて泣いていました。当の私は、自分で言ったことも忘れていた程度のこと、わざわざ夜道を足利から佐野の拙宅まで訪ねて来られたことに啞然とさせられました。同時に、たわいない一言でも教師の一言はこんなに人を動かすものかと身の引き締まる思いでありました。人は誉められなくても、居ることを認めてもらうだけでも大きな心の支えになるのだとつくづく思った次第です。

尊敬に値する立派な先生はたくさんいらっしゃいます。その立派な先生の中にも自分の真意が伝わらないと悩んでいる先生はおられます。真意まで伝わるかどうかは別として、先ず、相手を認め（受け容れ）、相手の波長に合わせるから話を始めてみなければ何も伝わらないということなのです。このことは生徒と教師の間のみならず教師間とて変わりはありません。私見ながら、良好な人間関係の根本は「人は認めてくれる人を認める」という同志的な信頼感にあると思います。人間を相手とする教育に携わる教師にとっては、とりもおさず、人は誰しも誰かに認めてもらいたいと思う自然な願いこそ大切にしなければならぬということではないでしょうか。

退職の挨拶状に「無事、大過なく」と書きたかった。しかし、我が教師人生を振り返ってみれば、小過・中過は言うに及ばず、……もずいぶんあったハズ。その大火を未然に防いでくれたり、ボヤのうちに消し止めてくれたのは、周囲の皆様であった。また、「生徒のためなら何でもやる」仲間に恵まれたのも幸運だった。

さて、学生時代、自分を愛えたくて始めた硬式庭球のとりこになった。高校の先生になつて、このスポーツを栃木県に広めたいと強く思った。現在でこそ、「テニス」と呼ばれているが、当時はラケットも重く（毛の生えた球をソロソロリと打っている）マイナースポーツであった。最初の赴任校で、念願かなって三年目に同好会（予算なし）として認められた。大好きなことができるので、毎日、楽しくて仕方なかった。給料の大半をつぎ込んで、生徒たちと猛練習の日々を過ごした。彼らもよくついてきてくれた。幸か不幸か、県内では未普及競技であったが故、「努力と心意気」が報われる時代だった。インターハイ出場を目標にし、十五年間で、十二回出場した。出場できなかった（つまり、県大会優勝できなかった）のは一年目、三年目、十五年目。

数多い思い出から二つ。まず、茨城県での関東大会男子ダブルス。雨の中、大接戦の末、敗北。帰りのバスは超満員で、突然、赤ん坊が泣き出した。母親が必死になだめたが、効果はなく、車中は何とも気まずい雰囲気となった。その気の毒な母親に対して、「仕方ないですよ。赤ちゃんは泣くのが仕事だから」と大きな声がかげられた。イライラした空気は、一転、新しい命を祝福する明るいものとなった。声の主は、我がダブルスの二人であ

った。次に、新潟県でのインターハイ女子団体。3回戦の相手は名門S学園で、No.1のM選手は前年度高校ランキング第2位のスーパースター。しかし、我がチームNo.1のK選手、まったく臆せず「日本で2番目に強い高校生がどんなもんか、先生、がんばってください」と張り切って、コートへ。両選手ともよく走り、強打の応酬の末、Kが7-5で勝利。偶然の勝利ではない。試合前に、精神的に「負けていない」ことが勝因だった。

部顧問として、心掛けたのは試合引率等の授業振り替えを徹底することであった。プリントごっこ（安直な自習用プリント配布）を避けた。それでも、大会が続けば、多くの同僚に迷惑をかけてしまう。だから、自分の時間が空いているときは、誰の仕事でも積極的に手伝った。結果として、感謝されながらいろいろな仕事を覚えることができた。そもそも、たかが県大会で優勝したくらいで、顧問がテングになると、部員にもノー天気が移ってしまう。あげく、「授業中居眠りしてもいいんだ、運動だけやってりゃいいんだ」などと言い出しかねない。まず、教師は授業第一（分かる、イイ授業をする。自習にはししない）、そして必ず希望して担任になるべし。逃げるな、棄するな。

最後に……。仕事をこなしていく上で、「雑用が多くて」と抜かすような教師になるな。生徒に関わる一切の仕事に「雑な」仕事などない。そういう日常の仕事は、手際よく、記録性を持たせて処理する工夫をしる。雑用が多いとこぼすヤツに限って、肝心の仕事雑だ。学習指導でも生徒指導でも独り善がりやで、親切なアドバイスを受け入れられない、テストの採点が遅い。「雑用が」と聞いたら、要注意。他山の石として、自戒されたい。

私の教員生活の時期は、ドルショック、オイルショックから始まる社会の急激な変容が、「学校教育」にも次々と大きな影響を与えてきた時代と重なる。この状況は現在も加速度的に進行中である。従って、参考になるか分からないが、自分が教員として心掛けるようにしてきたことをいくつか述べてみたい。

① 初心忘るべからず。

「どうして先生になったのですか」という質問を、生徒からたびたび受けたが、そのたびに、自分自身を振り返るよい機会となった。人間観、世界観、教育観など、激しい変化に流されないために、自分の原点をしっかりとして押さえておくことは大切であると思う。

② 自分自身の一人称として、「先生」を使わなかったこと。

生徒に対して、「先生は……」と語りかける人がいる。私は、「先生」という言葉は尊称であると思っているので、いつも「私は」と使ってきた。保護者には「先生は……」とは言わないだろう。「学校教育」において、生徒と真摯に向かい合う時に教師が持つべき姿勢、意識の一つであると思ってきた。如何であろうか。

③ 生徒を理解することに努める。

学校教育には信頼関係が必要であるのは自明である。そして信頼関係成立の基本は、生徒理解への姿勢であると思う。「教師は検察官でもなければ裁判官でもない、教師である」と、自戒の念を強く持つようになった。思いがけない経験を何回もするに従い、少しでも

生徒を丸ごと理解しようと、機会を捉えて生徒から学ぶことにも努めるようにしてきたつもりである。教室のみならず、清掃時や部活動などよい機会であった。

生徒指導に苦勞し、効果を上げている人ほど、家庭環境なども含めて、生徒に立ち入っていくことが多いように感じる。これも信頼関係を作る一つの機会であると思う。そこで知った秘密を漏らすこと、信頼関係を裏切ることとは、「教育」と対極にあることは自明の理である。知識を伝えるだけが教師ではないし、教師の生き甲斐ではない、と思う。

今私が思う「学校教育」とは、広い意味での人間形成の基礎作り、大げさに言えば人類の発展のための基盤となるべきものである、と思う。

④ 信頼・尊敬できる教師から学ぶ。

私は、日常の教育活動を通して、信頼し尊敬する方たちが、どのように考え判断するか、関心を持っていた。その時には解らなくても、ずつと後で解ることもあった。その考え方にならない、自分のものとしたことがいくつもある。私が信頼し尊敬してきた方たちは、しっかりとした人間観を持つとともに、生徒たちへ惜しみなく愛情を注いでいた。教員としても人間としても立派であるように思えた。自分の役割をしっかり果たそうとしていれば、身の回りに、見習うべき素晴らしい方たちが、事例が、たくさん見つかるはずである。生徒の一生にもかかわることもある。自己研鑽も勿論必要であるが、しっかりと習って、栃木の教育を支えている「こころ」を、次の時代の人につないでいくことを心から願っている。

## ある保護者との出会い

人にはいろいろな出会いがある。そのことが人の生き方や考え方に大きな影響を与えることさえある。私が教職十年になる頃であったと記憶しているが、今でも忘れないある保護者との出会いがあった。相談という場であったのでごく当たり前の光景であったが、その中で保護者から出た衝撃的なことが私にとっては非常に重みのある言葉であり、忘れることのできない言葉であった。

当時私はT養護学校（現在は特別支援学校）で入学相談を担当していた。この日は冬の寒い日で室内は暖房が入っていた。相談に来ていた子は上がTシャツ一枚と下は半ズボンの装いである。その格好で寒風の校庭に出て、持ってきたサッカーボールで元気に遊んでいた。「お子さん風邪をひきますから部屋に入れてください。」と母親に話すと、「大丈夫です。いつもあのように遊んでいますから」と一向に気にならない様子なので私の方が驚いてしまった。その後が続けて「実は小さい頃、『この子に薄着をさせていれば肺炎を起こし、もしかすると亡くなるかもしれない』と私は考えていたのです。でも先生、この子は肺炎を起こすどころか真冬でもシャツ一枚で過ごせるようになったのです。強いですよね。」と話していた母親の目から涙がこぼれていた。「私が考えたことは本当に罪なことです。でも、この子の強さを見せられて、私はこの子に最善を尽くしていこうと考えられるようになったのです。」このように話し終えた母親の表情には揺るぎない強さを感じた。障害児と判断されてから母親は家族内でも苦しんできたそうである。しかし、非情なことをしようとした結果として、子どもから突きつけられたのは「強く生きる」ことへの姿勢であったと思う。

それまでの相談の中で、多くの保護者が入学までに様々な歩みをしてきていることは理解していた。しかし、この保護者が一番悩み続けていた頃は、障害児に対する社会の理解も十分ではなかったのも事実である。この元氣な強い子が入学する頃は養護学校が義務制になつて間もない頃であった。私がT養護学校に赴任した昭和四十九年は、まだ義務制前で、小学部に入学する子どもに対しても入学選考を行っており、就学猶予数も今と比べるとかなり多い時代だった。昭和五十四年に養護学校の義務制がスタートしたが、まだ施行後三十年に達していない。それだけ養護学校の義務制の歴史は浅いのである。

ただ義務制前と比較しても、今は特別支援教育への理解も深まり、学校間の交流や特別支援学校の児童生徒の居住する小・中学校での居住地校交流も盛んに行われている。社会全体の障害児に対する認識や理解も大きく変化してきていると確信している。しかし、自分子どもが障害児であることが分かっているからの親の心の内は想像できないものがあり、このことは周りの理解が深まっても大きな差異はないのだと考えている。

私はこの保護者と出会えたことにより、特別支援教育に携わっていく大きな力、一つ一つを見つめていく大切さを教えられたと思っている。仕事で悩んだ時など必ず思い出すことにはしている。その都度頑張らなくてとは励まされ、私の歩みを支えてくれた大切な心のバックボーンであったのだと感謝している。

## 病気でなれた素直な生き方

今日、教育に期待するものが大きく、色々な教育改革が叫ばれている。「開かれた学校」「学校評議員」「学校評価」「教員評価」等がそれである。そのため学校現場は大変な努力を求められている。そこで、教員としての自分の半生を振り返り、上手に自分とつきあうメンタルヘルスの観点から、いくつか述べてみたい。参考になれば幸甚である。

社会人（北海道の町役場）から大学へ進学し、昭和五十二年に二十九歳（子どもはすでに一人いた）で教師のスタートを切らずに、先輩に迷惑だけはあったと思う。しかし、今思うと大胆な発言や怖い者知らずで、先輩に迷惑をかけたかも知れない。当時は、教育にとって必要な精神的な余裕を、教員は持っていたのではないかと思う。

私は、人々家庭の中で人間としての基礎が築かれ、学校教育によって人間として成長すると考えていたので、教育の目標はシンプルでいいと今でも思っている。今で言うところの「不易」の部分である。それは生徒とどう関わり、生徒と対峙していくかの「心の教育」である。生徒に迎合したりなれ合ったりではなく、喜怒哀楽を見せながらも、良いことは良い、悪いことは悪いという毅然とした態度で接することが大切であると思っている。とは言いがらも、教師は格好良くないといけないという意識があったり、教科書的で教師からの一方的な指導であったことに気づいたのは、三十代後半に入ってからだと思ふ。先輩の仕事を盗み（参考にし）ながら、先輩の話聞くのが好きだった。失敗を繰り返しながらも、全体的に地味ではあるが堅実で質素に仕事が出来ると思えるようになったのは、四十代に入ってからかも知れない。社会そのものが競争原理に組み込まれているのは否定

できないが、「人生そのものに勝ち負けという言葉はない」ということを、自分が教師を選択した経歴を交えながら、生徒に意識して話すようになったのはこの頃である。人間としての価値は一人ひとり違うということ。人間としての自分（弱い自分と強い自分）をみせるのはマイナスではなく、生徒が求めているもの一つであることを知ったのも、この年代であった。生徒は教師一人ひとりの人生の話を聞くのは好きだと思う。肩の力を抜き、年甲斐もなく教育のロマンを語れる自分に酔いしれた時、生徒からの信頼も出てきたように思うし、生徒から教わる余裕も出てきた。それでも無意識にあった傲慢な態度が、五十七歳の時脳内出血で倒れ、「生かされている自分」を感じた時、自然に素直な自分になれたことは大きい。

最後に浅学非才の身でありながら、失礼とは思いつつ若手教師に期待することは、教育者として自分が成長するために何を求めるべきか課題を見つけて研鑽していくこと。無理せずありのままの自分を信じ、何でも語れる友を作りメンタルをリフレッシュさせること。感謝と有り難うの気持ち忘れず、資質向上のために頑張つて欲しいと思う。

江戸後期の歌人・禅僧の良寛が七十三歳の時に詠んだ句に、  
裏を見せ 表を見せて 散るもみじ

というのがある。これは素直な生き方、真実の生き方、何事にも喜ぶ感謝の生き方を教えているのではなからうか。今なお自戒の言葉として脳裏に刻みこんでいる。

平成二十年三月三十一日で三十八年間の教員生活を終えた。周囲の皆さんのおかげで、無事退職に至ったことは感謝でいっぱいである。この間には、折々にテレビドラマ顔負けの出来事があったが、その一端を紹介し皆さんの今後の参考にしていただきたい。

昭和四十五年、最初の赴任校は当時「教育困難校」として有名な東西の高校だった。私が赴任する二年前には「生徒による暴動」が起こり、県の教育界を驚愕させた事件として、ニュースでも大きく取りあげられていた。ある程度覚悟して赴任した学校だったが、それは始業式の日すぐに起こった。「目つきが悪い」と十五、十六人の生徒に囲まれ威嚇されたのである。血気盛んだった私はすぐ阻止行動に出ようとしたが、担当部活動の生徒にすんでの所で止められた。暴力教師として一日で免職になるまで「首の皮一枚」であった。

最初の授業は教室に生徒を入れることから始まった。毎日の授業は、難関大学を目指す生徒から、既習事項すらほとんど理解していない生徒までが混在する中で行われた。教師としての非力さに落胆し、自分は教員に向いていないのではないかとも思ったが、辞める覚悟でやってやろうと腹を括った。それからは、生徒とのきっかけを掴むため、興味を引くものはすべて学んだ。漫画・将棋・合気道・腕相撲・登山・釣り・アマチュア無線等あらゆるものである。加えて、周囲の人たちと協力することを大切にした。もちろん、学校のことは全て忘れて気分転換する時間もしっかりと持った。歯車が噛み合ってくると、生徒は意外と純朴で、授業や部活動もけっこう熱心だった。荒れていたのは会社の斜陽化と教職員の短期異動に心配・抵抗していた結果だと分かったのは間もなくのことであった。

そこでは三年間の勤務だったが、別れの日、生徒たちが駅まで見送りに来てくれたのが昨日のこのようである。もしも、最初に短気を起こし弾力的に対応しなかったら、正しい生徒理解もできず、教員としての喜びも知らぬまま職を辞していただろう。今の自分はいなかったのである。このときの経験と判断が「解決できないことはない」という私の教育者としての信念となった。教員は固定観念にとらわれず、生徒の全てを受け止めて、しなやかに対応・工夫することが最も大切なことである。困難は「遣り甲斐」として楽しむ「癖」をつけてしまおうと気楽である。

教員生活の最後は、県内二番目の中高一貫教育校であった。そこでは、教育目標の設定などで年間数十回の会議や説明会が夜遅くまで続き、十分すぎる「遣り甲斐」があった。一緒に頑張った教職員に改めて深く敬意を表したい。四月からは、働く環境は変わったが教員として残された課題を解決していくつもりである。

八月八日、「北京オリンピック」が始まった。柔道四十八kg級では「ママでも金」の谷選手が銅メダルを獲得。水泳の北島選手が期待どおり世界新記録で二連覇を果たして日本中を沸かした。しかし、その一方では、中国での爆破事件やクルジア紛争など、「スポーツで世界を結ぶ」というオリンピック精神とはかけ離れた現状が浮き彫りとなった。これら諸問題の解決は教育でしか成し得ない。他をよく理解し平和に貢献できるしなやかな人材の育成が、私たち教育者に課せられた最も大切な責務であると確信している。そのためにも、皆さんには、自信と誇りを持って教職に臨まれることを心から願っている。

## 教員生活における「私の心得」

私が教員生活において「心得」としてきたことをいくつか書き留め、原稿依頼の期待に応えられるか不安ですが、責めを果たしたいと思います。

### 一・教員初任のころ

私が最初に赴任したのは、昭和四十八年四月、小山高定時制でした。生徒数は昭和五十年頃をピークに激増激減の時期で、全定併置校では全国一の規模を誇り、年配の先生方と、激増期ということもあってか、新採教員の配置が多く若い先生方で構成された学校でした。年配の先生方からは、成績・諸帳簿の書き方や仕事の手順などを教えていただきました。授業が終わり、清掃・部活動も終わるのが二十二時。それから若い教員の楽しみの時間となり、冬はストーブを囲みながら職員室で教育談義をし、さらに、安く夜食がとれて会話ができるレストランを探しては、深夜一時・二時くらいまで議論する日々でした。

若い先輩の先生方からは、議論する中で、担任としての仕事、生徒との触れ合いや係仕事のやり方などのアドバイスをいただきました。

先輩の先生方から教えていただいたことを自分なりに受け止め、工夫・改善しながら、仕事に生徒に体当たりでぶつかっていった新任期でした。

このような議論の中から学び、「心得」としてきたことは次のようなことです。

- (1) 新任三年間は、恥ずかしがらずに先輩の先生方に何でも聞くこと。三年経って同じことを聞くようならば恥ずかしいと思え。
- (2) 仕事のやり方を教えてもらうことは大切だが、仕事は盗んで自分のやり方を創るもの。

### (3) 教員は授業が命であるが、雑用にも強くなれ。

#### 二・四十歳代のころ

年齢的に四十歳前後には、学年主任や校務分掌上では部長という立場に立つようになりませんが、私の場合は、県教委事務局社会教育課（現在の生涯学習課）という行政職に籍を置くことになりました。行政では、自分に割り振られた事業を推進したり、課題解決を図るために新規事業を興して予算の確保に努めます。基本的には担当者レベルで自分なりに創意工夫しながら事業を展開していくことになりませんが、上司に進捗状況や自分の考えを伝える（報告・連絡・相談）などして、判断を受けながら事業を執行することが大切なことではないかと思えます。

このように事業を展開する中で、「心得」としてきたのが次のようなことですが、学校現場でも共通することではないかと思えます。

- (1) 仕事は組織でするもの。そのためには適時適切なホウレンソウが最も大切。
- (2) その人がいなければできない仕事は、つくるべからず。
- (3) 上司が困らないようにするために、自分はどう判断し、どう行動すべきかを熟考すべし。いつの時代にも「いまの若者は」と言われますが、判断し↓行動したら↓その結果はどうなるのか。周囲にどのような影響をもたらすかを考え、上司への適時適切なホウレンソウと、判断は自分サイドで良いか、上司の判断を仰ぐべきかを熟慮したうえで行動力・実行力を「いまの若者」に大いに期待したいと思えます。

昭和六十年四月、教育事務所にて社会体育（現在の生涯スポーツ）の指導主事として赴任した。最初の仕事として、張り切って第一回目の市町行政担当者会議を開催した。会議に真つ先に来たある町の行政担当係長の口から、私に向けて最初に出た言葉が「あーあ、こんな高いところから俺たちを見下ろしながら仕事をしているんじゃないや、俺たちの気持ちは分かりつこないな。」初対面で頭を金槌で叩かれたようで、強烈なショックを受けた。会議をする場所とは、確かに五階にあり、窓から市町が一望できた。市町の担当者や社会体育に携わる関係者とは、常に一緒に活動していかなければ成り立たないことであるので、気持ちを理解しあうのは当然のことであると思っていた。しかし、事務所の担当者に対する市町の担当者の意識が、こちらで考えていたほど甘くはなかった。会議終了後、所長のところに飛んでいった。「所長、お願いがあります。これからは、市町の担当者等をこちらに呼ぶのではなく、私から出向いてお願いに行ったり、説明をしたり、会議をそれぞれの市町で開催したいのです。ですから私に旅費をください。」とお願いをした。幸いにも所長が私の申し入れに対して全面的に理解を示してくれた。顔の見えない行政から顔を出す行政に、電話行政からフットワークの軽いこちらから出向く行政へ、とそのときから転換した。電話やファックスでは、なかなか伝わらないことについて、直接そこに出向いて説明する行政に変化させていった。時には、電話で文句や苦情に思えることも、一端聞き、電話を置くとすぐにそこを訪ねて行き、直接、顔を突き合わせてとことん徹底的に聞いた。一時間、二時間、時間に関係なく相手が全部言い尽くすまで聞いた。電話とは違い、顔を見ながら聞くと相手の気持ちの変化等が表情や態度に表れてくるのがこちらでも理解

できるので、相槌の打ち方や答え方が分かってくる。また、相手もこちらがどのような気持ちや真剣な態度で聞いているのかも理解できる。最後は、当然お互いの距離が近づき、歩み寄りが出てくる。気むずかしい担当者や一般の方も一年間徹底して続けたとさすがに理解を示してくれた。この方法をそのときから勤務した八年間続けた。三年目くらいからは、難しい問題や期日のない急な課題に対しても快く対応してくれるようになった。ある時県当局から「国の新しい補助事業を受けてくれる市町村がない。困っている。どうしてもそちらの市（私の担当している市）に受けてくれるようにお願いをして欲しい。」と要請を受けた。一回目の交渉は県から直接当該市にお願いをしたが、断られてしまった、とのことであった。二回目にも一緒に当該市に出向いて交渉にあたった。結果、すぐに引き受けていただいた。その当時の社会体育ではめずらしい先駆的な研究分野であった。三年間、昼夜関係なく市担当者や一般の社会体育クラブ関係者、そして日本の社会体育分野では第一人者の大学の教授とともに研究に没頭した。全国の社会体育関係者の前で担当者が研究を発表し、高い評価を得ることができた。その後、その研究が文部大臣賞に輝き、現在の総合型スポーツクラブの前身になった。

気持ちを通じ合う第一歩は、相手のことを受け入れ、理解することであり、こちらの意思を伝えることである。そのためには、労を惜しまず自分の足を使い、こちらから歩み寄ることである。たとえ無駄足に終わっても自分から能動的かつ積極的に動き、努力することによって、必ず何かが残ри、いつかはお互いを理解し合えることに繋がっていくに違いない。

## 定時制二十三年間の勤務から得たこと・考えたこと

私は昨年度、真岡高校定時制課程の勤務を最後に定年退職しました。真岡高校定時制には昭和六十年分から二十三年間勤務したことになり、私の教職年数三十七年間の約三分の二が、なんと同一の定時制の勤務であり、高校の教員としては稀な存在かと思えます。

### 一、定時制教育は教育の原点である

これは、私が真高定時制に赴任してから十年くらい経た時点で私が感じとった信条であり、同時に教員としての今までの私を支えてきてくれたものであります。定時制勤務はもちろん私にとって初めての経験で、それまでの全日制高校とは生徒の実態は大きくちがっていて、担任としてその指導に手こずり、ストレスが溜まる一方でした。しかし、そのような中で、私は当時のある先生から大きな示唆を受けることになったのです。それは、エネルギーシユな保健体育担当（専門は柔道）の大山光瑞先生との出会いでした。私は、大山先生が定年退職された平成九年三月まで十二年間いっしょに勤務し、その間、先生から様々なことを教えていただきました。特に印象に残っていることは、年間を通して部活動の指導に徹したことです。氷点下のどんなに寒い日でも、汗が吹き出るような酷暑の時でも、鍵当番の先生が帰宅したあとでも、放課後の柔道場には必ず大山先生がいて気合のこめられた声で夜遅くまで響いていました。また先生は生徒に何かあると真夜中でもすぐに飛んで行ったし、反抗的な生徒とは徹底的に相手が納得するまで話し合いをしました。その時は生徒に嫌われたとしても必要なことは断固やるべきだという信念を先生は持っていました。職員会議では生徒指導上の意見が管理職と違っても、堂々と自分の意見を述べてい

ました。生徒と接する時間をできるだけ多く持つことを心がけ、生徒のよさを多面的な視点から認め、厳しさの中にも温かさあふれる大山先生の指導・姿勢、「これこそが定時制の生徒指導だ」と私は強く感じることができました。

### 二、教員の健康管理、特に「心の健康」の大切さについて

定時制に着任した時の私の年齢は三十七歳で、小学校四年生の長男が真っ黒になって学童野球に興じ、二歳年下の次男も兄の真似をして球を追いかけていました。その時、私は長男の学童野球チームの保護者会で子どもたちと一緒にやって応援し、楽しい時間・幸せと感じる時間を持つことができました。二年後、長男の所属するチームは春の県大会で準優勝し、さらに二年後、次男は主将として夏の県大会開会式で選手代表宣誓をしました。今考えると、まさにあの時の子どもたちを応援した楽しい経験が、私に定時制の教員としての心のエネルギーを補充してくれたような気がします。最近、教員を取り巻く環境は悪くなって心病む教員が急増してきていますが、たまには学校を忘れ、何かに心を奪われて過ごす幸せなひと時が、困難に打ち勝つエネルギーを生み出す源になることを信じて、これからの先生には頑張ってほしいと思います。

最後に、私がいつも座右の銘としている丸山隆先生（県教育研究所相談部長）の言葉を紹介して筆を置くことにします。「子どもたちは先生次第で学校が好きになったり、嫌いになったり。子どもたちの心の発達に天と地ほどの差ができる。自分を認めてくれる、信頼に足る教師に出会えば、進んで心を開き、たくましく成長していく。尊敬する教師との邂逅が以降の人生を決定する場合も少なくない。」

退職して早四ヶ月が過ぎてしまった。現職時代と大きく違ったことは、夕暮れどきの時間の過ごし方である。四時ごろ田んぼのあぜ道から眺める高原山、那須連山の夕日は絶景である。もちろん現職時も同じような景色は存在したであろうが、三十八年間の教職を全うしたことで景色が絶景になった気がする。

私は昭和四十五年に栃木県の保健体育教師として採用になった。当時「でもしか先生」という言葉があったが、私はそのどちらでもなかったのに気にせず喜び勇んで先生になった。当時のアルバムを見ると、ミニスカートが流行していたようで、入学式の記念写真に堂々とした脚が写っている。教員デビューの懐かしい写真である。現在のように厳しい教員試験ではなかったにしても、合格して教員になったおかげで、泣き笑いのある豊かな人生を送ることができた。担任で、生徒指導で、部活動で出会った先生方と生徒は私の財産である。

退職して一ヶ月が過ぎた頃、卒業生がやってきた。私に三万円を借りていたという。そのうちの一万円を持参してきた。全く覚えていないことで受け取るに受け取れず、子どもの小遣いにと帰り際に渡した。高校卒業後二十数年たつての出来事だけにその生徒の礼儀が嬉しかった。また自分自身そんな思いやりを持ち合わせていたことが驚きでもあった。

私の教員生活を振り返ってみると、何かを一生懸命やろうとか、目的を持って仕事に取り組もうとかはあまりなく、その学校の一日、一月、一年間の流れにすいすいと乗ってやってきたように思える。しかし、そうとはいえ小さな場面で私は私なりに自分らしさを出

してきたと思っている。特に先生方とのつきあい、親睦は一番大切にした。先生という集団が大好きだった。このことには本当に一生懸命だった。

一方、意識が続けてきたことがある。ある学校で校長が言ったこと、それは「陽はまだ高い」という言葉だった。私なりに陽の高いうちは精一杯働こうと決め、ほぼそれに従った。当時私には二人の小さい子どもがいた。校長はおんぶして部活動の指導をしていた私の姿をみて「今が一番いい仕事ができる時だよ」といった。正に今あのときが一番よかったと振り返ることができる。家庭があり小さい子どもがいる。そこへ部活動（陸上競技）の指導ができる。この環境が最高だと言ってくれたのだろう。昭和四十年代、学校の植木におむつを干しての部活動指導、そんなことが許される時代だった。

また、私は五十歳になったとき自身に誓ったことがある。それは、今後仕事を頼まれたとき面倒であっても断らないということ。残された十年は今までの経験を生かしてやるはずだと言いつ聞かせた。そして、校内外の仕事をほとんど引き受けた。大変だったというより、最後の十年を充実させた結果になった。忙しかったけれど苦ではなかった。関係者の協力があつたことはもちろんである。

あまり気張らず、まわりの流れを見て行動していれば、まわりの人たちが手をさしのべてくれ、結果的によい仕事ができるものだ。晴れた日は晴れたように自分らしく背伸びし、曇りの日は曇りのように落ち込む。こんな繰り返しの三十八年間だった。これからの皆さんに伝えたいこと、それはそれぞれの職場に適応しながらも小さな場面、場面で自分らしさをしっかり印象づけて学校を支えてほしいということです。

## 私がめざした（ている）三人の師

「教育は人なり」と言われるように、学校教育の場において、一人の人間としての「教師」が果たす役割は大きい。人は人によって成長する。身近に、尊敬できる人、目標となる人がいることは大切であり、幸せなことだ。私の人生に大きな影響を与え、人間として、教師としての目標となった三人の師について紹介したい。

高校生の時、「古典」を教えていただいたS・O先生との出会いは、その後の私の生き方を決定づけたと言っても過言ではない。先生の授業は明快で分かりやすく、専門教科に対する造詣の深さ、教師としての真摯な姿勢、あふれ出る人間愛、民主主義の具現者のようなお人柄；すべてが魅力的で、先生の授業が待ち遠しかった。私も大きくなったら先生のような人間になりたい、少年の直感、人生経験の有無を越え、人間の本質を感じてしまふものだ。私はその後ずっとこの恩師を目標に国語教師を続けてきたように思う。

昭和四十年代始め、私は大学の国文科に籍を置いていた。折しも学生運動の嵐が吹き荒れる中、日に日に、学生活動家の行動は激しさを増し、ロッキアウトと称して、大学はしばしば封鎖され、講義や授業は中断し、正常化に向けての学生と大学側との話し合いは平行線のまま、膠着状態が続いた。私たち一般学生は、一日も早い授業の再開をはかるべく、当時国文科の教授だったH・O教授に事態の收拾をお願いした。一般学生立ち会ひの中、活動学生家との話し合い（団交）は、最初は険悪な雰囲気だったが、先生の誠実なお人柄、体制に媚びない信念と正義感、的確な問題点の指摘、歌人としての豊かな想像力と人間愛、そして何よりも学生と学問を想う温かい気持ちにがにじみ出る感動的なものだった。それか

ら間もなくして授業は再開された。それまで、学長や学生部長との話し合いでは、全く聞く耳を持たなかった学生たちが軟化し、バリケードを解除したのだった。私は今でも、あの時の情景を昨日のことのように思い出す。私たちの世代は、戦後民主主義教育の申し子として、自由と平等、人権、個人主義を謳歌していた。しかしそれは地に足がついたものではなく、観念的で脆弱なものだった。意見を異にする人たちと真正面から向き合い、ひるまず、逃げず、勇気と信念をもってとことん話し合う先生の姿は、私のめざす理想の大人であった。

高校教師になって三年目頃だったと思う。私は県南の夜間定時制高校に勤務していた。暇があると同僚たちと口角泡を飛ばし、かんかんがくがく、教育論や人生論を論じあっていたが、自分は教師に向いていないのではないかと、と深刻に悩み、日々悶々としていた頃でもあった。そんな中、私は、普段から尊敬していた七歳年上の先輩教師K・I先生から、「教師の心構え」として教えていただいたことがある。「教師は教師であると同時に、医者であり、役者であり、芸術家であり、宗教家でもある。こんなやり甲斐のある仕事があるか、自分に甘えることなく教師の職を極めてほしい」と。最初はよく理解できなかったが、日々の実践を重ねていくうちに、この言葉の持つ意味の深さが、次第に実感として分かるようになってきた。まさに「目から鱗」の感じで、自分の甘さを痛感し、教師としての進むべき道を指し示された思いだった。今でも穏やかな先生のお顔とともに、この教えは、座右の銘として私の心の支えとなっている。

ここ数年、教育関連の法令が改正されるなど、私たちを取り巻く教育情勢が大きく変わってきています。そのような中、私たちには様々な新たな対応が求められているところで、教員一人ひとりの足元がしかりしていれば別にあわてることはないと思います。

標題の文言は、もともと「関係が相談する」をもじったもので、教育をする上で自身身の座右の銘としているものです。教員は教育内容方法についての研究をやることは当たり前ですが、同時に、その基盤としての人間関係づくりも大切だと思っています。同じ事を同じような表情で同じように教えても、生徒との信頼関係ができてるかそうでないかによって全く正反対の反応が返ってきた経験はざらにあります。有名な人の授業がたった一時間で多くの生徒を感動させる、ということも全く別物ではなく、世の中の評価に裏付けられたその講師に対する生徒の信頼感がなせる技ではないでしょうか。

また、私は、平成元年に県教育長になられた小菅充先生からご紹介いただいた、スイスの農業普及員が農家の人々に対して指導する時の心構えが忘れられません。それは、

- ① 話をしても聞いていないとは限らない
- ② 聞いていても理解しているとは限らない
- ③ 理解しても納得しているとは限らない
- ④ 納得しても行動するとは限らない
- ⑤ 行動しても長続きするとは限らない

の五項目で、人々が「くしない」ということをその人のせいにしないという教えでした。

相手との信頼関係がないとすると、場合によっては話もさせてもらえませんが、いわゆる「聞く耳を持たない」状況になることもあります。これが生徒だったら、教育どころの話ではありません。したがって、私たちは毎日の教育活動とおして子どもとの信頼関係を維持していかなければならないと思います。そしてまた、私たちは子どもたちに毎日さまざまな指導をしています。時として指導がうまくいかない時があります。そのような時、えてして子どもたちやその家庭、社会のせいにしてがちです。しかし、子どもたちがそうする理由、そうしない理由の一つを私たち自身の課題としてとらえた方がよいことが少なくありません。私たちは子どもたちとの信頼関係の中でそれらのことをきちんと見据え、教育に当たらなければならぬと思います。右の五項目はそのことを教えてくれました。

かつて、私は初任者研修や教職五年目研修、その他の専門研修等に携わり、先生方の話をたくさん聞く機会がありました。そこでは、先生方が本当に子どもたちのことを、保護者のことを、世の中のことを真剣に考え、何とかしたいという熱い思いを感じました。その熱意を忘れず、常に誠実に対処する限り、子どもたちからの信頼を得、すばらしい教育ができると思います。

私たちは教育の専門家です。言うまでもないことですが、教育の専門家とは、一定の専門的知識と力量を持ち、自分自身の判断力を持って教育に当たり、そして常に自己変革に努めている教員です。どうぞ、皆さんも自分自身を信じ、夢と希望をもってこれからの教育に邁進してください。

## 出会い

教師生活を卒業して一息ついて振り返ると、半世紀近くの年月の中で、実に多くの人々との出会いがあったことであらためて驚くとともに、それらの方々から言葉で語り尽くせないほどのたくさんの方の事を教えていただいたことに、感謝の念でいっぱいになる。

小生は、昭和三十八年から本県東部の高校で三年間の高校生活を送った。入学した高校には素晴らしく充実した先生方がそろっていた。三年間担任をしていただいた物理のW先生は、生徒たちの心に火を付ける魔術師だった。授業中の「うん、いいねその発想は。私も気付かなかったよ・・・」という先生の一言で、私たち生徒は夢中になって思考を巡らしていた。大学で教えるはずだったが、郷里に帰って高校の先生になったと生徒たちに語り継がれていたW先生に、解けない問題などあるはずはなかったのだが、「あれで俺たちは乗せられたんだ」と気づいたのは、卒業して何年も経つてからのことであった。今でも同級会のたびに、このことが話題にならなかつたことはない。また、先生は時々第一線で研究をしている先輩を授業に呼んで、先端分野の研究の様子などを聞かせてくれた。心を躍らせてわくわくして聞いた内容は、今でも鮮明に覚えている。先生が担任したクラスからは、不思議に大学や研究所に籍を置いて活躍している同窓生が多いのは、生徒の学びの心に火を付ける魔術師だったからに違いない。

新任で着任されたF先生とN先生には英語を教わった。二人ともにこやかな表情で授業を進められる先生であったが、指導の中身は厳しかった。授業中の先生からの質問に答え

られるように、前の晩に誰もが必死で予習をして授業に出るのだが、質問に正解できて着席を許されることはなかなかなかった。「私も一所懸命に勉強して教える。だから君たちも真剣に勉強しろ。」F先生の口癖の言葉が今でも私の中に残っている。社会科のY先生からは、世界地理や日本地理を教わった。当時は未だ海外に出かける人はごく僅かであったが、先生はたびたび国内外を旅行されてその様子をスライドにして授業で見せてくださった。教科書や資料集に加えて先生の生の見聞を交えての地理の授業は、実に楽しいものであった。サンショウウオ研究の第一人者である生物のA先生は、授業の中で黒板にあつという間に芸術的とも思えるほどの見事な図を描かれた。多感な高校生時代に生涯を通して尊敬し、憧れ続けることができる師に出会えたことは何事にもまさる幸せであった。

W先生から薫陶を受けた東郷秀光先生（慶応大学名誉教授）が「我が青春の茂木高等学校」の中で、恩師の熱血あふれる指導の様子を著しておられるが、昭和の時代にはここに紹介させていただいたような教師と生徒との関係が、県内各地の高等学校で展開されていたのではないかと考えている。現在、教育のさらなる充実を目指した様々な改革が進められているが、平成の時代の中でも、小生が出会うことのできたような教師と生徒との関係が多くて多くの学校で展開されていると信じている。教育という営みは教師が憧れの存在として在り続けるとともに、教師が生徒たちの学びの心にかかっている火を付けることができるかにかかっているといえるのではないかと考えている。

自己を見つめる



## 人は魅かれて生きる

「あの先生のように生きたい。」高校時代に出逢った書とその師が私をそう駆り立てた。以来、高校の芸術科書道教員として三十八年が過ぎた。模倣時代・葛藤時代・自分流時代・自然体時代の四期を経た。・どう進む？の自問に、いつも周りの各先生はその答えを背中ですべてくれた。新任から七年間は徹底した模倣時代だった。例えば、「教育は、いかに多く生徒との共有時間を過ごすかに尽きる。」と語るある先生の影響で、私は宇都宮市の自宅から勤務校のある氏家町の旅館に住まいを移した。授業もそうだった。保健体育科の先生が常に生徒にとり体育とは何かの教科性を模索し、準備運動をグループごとに作らせて実施させたり、校庭の特色を生かして木登りや川跳びに挑戦させたりしていると、私も芸術とは？書道とは？を考え、教科が与える生徒への影響力に視点を当て、文化を習慣づけるための墨を磨り硯を砥石で研ぐ、用筆・運筆の徹底指導、忍耐力を養うための長編作品長恨歌全文を障子紙に書く等を実施した。研究授業も県内外に参加し、これはすこいと思える授業はそっくり真似をした。

しかし、生徒を指導する以前の問題として、自らの教科としての実力不足を痛感していた。葛藤時代が始まる。書道の力をつけるには師伝が本格への道となる。当時、顔真卿の書の臨書では右に出るものがないと評されていた山崎大抱という師の門を叩いた。「稽古」という東京通いがスタートする。一万五千円の月謝と交通費、月二回。更に、校長・教頭・芸術科の先生を説き伏せて、月曜の午後を空けてもらい、職専免を戴き、学ぶ形を作った。それは、師の死までの十三年間休まず続けた。その後は、残された同門の人々と

定期的に研究会と形を変え、今も継続している。「高い表現技術を持たない者は、高校芸術科教員を続ける資格が無い！」これは葛藤時代の自分に課したテーマだった。ほぼ十年を要した。専門を鍛えていくと、授業・部活動・校務分掌等仕事の質が確実に変化する。強さが生まれた。生徒会の指導でもPTA活動への対応でも、HR担任も果敢に取り組めるようになった。

そして、昭和六十二年十一月に全国高校書道科教員の栃木大会では公開授業を担当することになった。大字書表現に体操を取り入れた授業だった。全国大会の公開授業は正しい書教育の理念に基づく誰も決行していない展開が鉄則だった。自分流を余儀なくせられた。これを持ち越えると楽しく自分流を貫くことができた。やはり十年間を経過した。その間、東京の銀座で書の個展も開催できた。

五十歳台に差し掛かり変化が生じた。自分の持っているものを多くの人の役に立てたいという要求を抱くようになった。依頼があれば何でも書く。多忙でも受ける。困難なものなら、それで学べる。この頃から自然体時代となり、今に至る。この世に生きて、生徒のため・学校のため・社会のために自分を活躍させることは最大の喜びを感じる。人の求めに応じられる自分が居て、生かされているという自覚がある。

そして、何より、どの時代の中でも、自らの周りには私を魅了させてくれるあらゆる存在があった。師・先輩の先生方・同僚・生徒・保護者・学校・地域・所属する団体・多くの芸術家達・書の世界等々。私は「人は魅かれて生きる」存在なのだと思います。

「今日の講座には、何人の方が見えるか不安だな。なにしろ一ヶ月に一回だから。」回を重ねるたびに出席者が減っていくことへの恐怖。「来年は何の作品にしよう。あの作品ならおもしろくなるか。そもそも今年の講義おもしろかったのかなあ。」自分の講義に対する評判を確認するのはさらに恐ろしい。退屈な説明にならないようにと気合いを入れながら、そして毎回・毎年こんなふうにおどおどしながら、とうとう十年になった。

『万葉集』の講義、お願いできませんでしょうか。」町の図書館からご依頼があったのが平成十一年。それ以来、年間六回、五月から毎月第四日曜日、午後二時開始の九十分。定員三十名の、まことに浮世離れた文学講座が続いてきたのである。『万葉集』を四年間、『歎異抄』を一年間、『源氏物語』を五年間、受講生は高齢の女性が中心。教養、礼儀、申し分ない方々である。テキストは現在ワイド版岩波文庫を使用しているが、八年間はパソコンでの手作り。

「ああ、それ、カルチャーセンターですね。」「何々先生も『源氏』やっていると聞いていますよ。」「図書館が主催ならいいですね。楽でしょう。」そう、どうってことない、どこにでもある平凡な、日本古典文学を原文で読むという講座なのである。

講座が五年も過ぎた時、「予算の関係でこの講座は来年度から打ち切りになります。」とのこと。「ええー、では、せめて会場だけでも貸していただくの、だめですか。」「だめです。」この時、私はなぜか講座を終わりにする気にならず会場探しに奔走したのである。今思うと不思議だ。町の公民館に会場を移して講座は続いた。「頼まれ仕事の講座」が、

聴講生のみなさんのための「私の講座」に知らず知らずのうちに変わっていたのである。二年後、図書館から「また今度も図書館でやっていただけませんか。担当者も変わりましたし。」「はあ……」今に続いて十年目なのである。

いつやめてもいい講座をわざわざ続けてきたのはいったい何なのかといつも思う。日本古典文学、特に『万葉』と『源氏』の魅力であつたらうか。さわやかな歌群に満ちた『万葉集』、完成度の高い『源氏』の文章、いずれも一人の人間が全力を傾けるに値する作品だ。いやそれとも、聴講生のみなさんとのつながりが講座継続の源泉であつたらうか。毎年来てくださる方々のお顔を思うとやめるわけにいかない。やめる理由が見つからないのである。

そして、いったい何がおもしろくてこんなしんどいことをやっていたのであろうかとも思う。センスのある「話術」を磨くおもしろさ。継続することからにじみ出てくる「鈍感力」。そして何より「教える」ことこそ最高の「学び」だという実感。いずれも教育の原理であるとともにそれは私の生きる糧であつたということだ。一回切りの講義のために膨大な予習を校務とは別にやるのは相当な負担ではあつたが、私はこの講座に打ち打たれると同時に激励されてきたのだと思う。

「まだ、あれ、やっているんですか？」などと質問されたら、「そうなんです。まだ懲りずにやっているんですよ。」こう笑顔で答えることができるよう、気力・体力の維持に手抜きがあつてはならないと思う今日この頃である。

## 貯金をしよう

特別支援教育の世界に入りちようど三十年になります。私の貯金はどれくらい貯まったでしょう。目には見えない貯金ですが、引き出すばかりで貯金は底をついてきました。奇しくも養護学校が義務制になった昭和五十四年の採用です。私が赴任したT養護学校は義務制に併せて創られた新設校です。校舎の整備も教育課程もPTA活動まですべてがゼロからのスタートでした。私は校務分掌がPTA係となり、新しい組織づくりに悩み、失敗の連続に自信をなくしていたことを覚えています。

私見ですが、初代校長先生は仕事に厳しく無口で背中が物教える人でした。最初の朝の打合せで開口一番、先生方に実践してほしい事として次の二つを挙げました。

一 全員一人一研究を行い、まとめること。

一 職員信条は「いつも 前向きに あったかく」である。

途中からこの世界に入った私には、大変重い課題でした。自信喪失に陥っていた私ですが、放課後毎日日タオルを下げて石ころだらけの校庭整備に黙々と精を出す校長先生の背中を押される形で、一人一研究に取り組み始めました。毎年続けることは大変でしたが、今さらながら校長先生の偉大さを実感しています。

毎年テーマを決めて取り組みました。ある年はS子の事例研究だったり、交流教育推進のための実践報告や自閉症児の学習指導について等々です。遊び学習の実践は今も楽しい思い出です。思えば拙いまとめばかりでしたが、何とか一人一研究の精神を続けることができました。この精神を支えていたのが、当時のT養護学校の先生方全員がテーマを決め

て取り組む勉強会でした。一人だけでは決まることができません。当時この勉強会を大切に、大きく位置づけていたと思います。勉強会は、先生方の教員としての資質の向上という貯金になった気がします。毎年毎年の勉強会での実践がその後の私の特別支援学校教員としての貯金となりました。

職員信条「いつも 前向きに あったかく」は、三十年経った今でも手元にあり生きています。悩んだり迷ったとき、後悔したとき問い返しています。「前向きに」生きていくか、「あったかく」人に接しているかな……。そんなときいつも、明るく元気で懸命に頑張る子どもたちから、辛抱強い保護者の方々から「先生 あきらめないで」と背中を押され勇気を頂いて今日まで来ました。

教職最後の赴任地は東北の那須特別支援学校です。若さと活気に満ちた雰囲気にはじめれました。貯金も使い果たした自分にとっては不安でした。校務分掌で拠点校指導教員を兼務することになり、一年間のつもりでしたが五年間も続けることになりました。本校には毎年四〜六名の初任者が来ます。底をついた貯金の残りを引き出す思いで始めました。初任者の先生方にはまぶしい存在です。まるでリトマス試験紙のように何でも吸収してくれました。私も多くのことを学ばせていただきました。初任者の方には特別支援教育の種を播く人になってほしい。これからの教師生活のスタートに当たり、エールを送ることができたら、今まで出会った多くの素晴らしい子どもたちや保護者、先生方に恩返しができるのではないかと考えています。今日まで支えてくださった多くの方々感謝申し上げます。

## 「教師力Ⅱ生徒愛×情熱×創意工夫」

いろいろと教職員への風当たりが強い昨今、学校はストレスの多い職場であると思えます。しかし、教師は「教育立国」日本の基礎を造る大切な役目を果たし、「人間を育てるといふ崇高な使命」を帯びているとの誇りと責任を持って邁進して欲しい。ほ乳類の一種「ヒト」は、生まれて時間の経過とともに体は成長しますが、学ぶことによって「人間」になるのです。一方、我々公立学校の教師は、「血税によって養われている」ことも自覚することが肝要。その分を、目の前の生徒へお返ししなくては社会に申し訳が立たないことでしょう。

「教職とは、生徒の心に火をつけることである。そのためには、教師自らが熱く燃えていなければならぬ」という言葉があります。私なりに「教師力Ⅱ生徒愛×情熱×創意工夫」という方程式を提案します。少なくとも、この三要素のうちいずれが欠けても、教師としての力量は限りなくゼロに近づいてしまうことでしょう。

私も、残りの教師生活は僅かになってしまいました。まさに「光陰矢の如し」を実感しております。拙い経験から、後輩の先生方に一言述べさせていただきます。

### ◇二十歳代

あまり将来を見据えず、ガムシヤラな青年教師であれ。あなたの周りには、地平線が円形に広がっている。いろいろなことにチャレンジする、そこから何かが生み出されてくる。「行動なきところに結果なし」。先輩教員には謙虚に接し、その中で優れた部分だけを自分の中に取り込んでゆけばよい。書物の中にも偉人はいるが、どこの職場にも、目の前に

すばらしい人材が活躍しているものであり、終生の先輩・師となる可能性もある。

### ◇三十歳代

十年教師たる眼力を持つて、多忙な中にも、専門教科、教育方法等の分野（例えば教育相談）で何か研究テーマが見つければよい。仕事に打ち込んでさえいれば、自ずとテーマが眼前に現われて来るものであり、志を同じくする教師も必ず居る。教師生活の中で研究を深めてゆくことが、人間として教師としての自信につながり、その成果も生徒たちへ還元できるというものである。

### ◇四十歳代

中堅として、校務を推進。学校の主要な存在であり、今までの経験や実績の上に、学年主任や部長などになり、広い視野で教育を推進してゆく役回り。私生活でも、地域の活動に参画できたらいい（魚釣り、ゴルフ、宗教、ソバ打ち、音楽等々）。教師集団の中にだけ埋没しないで、広く交流して人間の幅を拡げておく。

### ◇五十歳代

それまでに蓄えた教師力を総括し、円熟した人間・教師として、生徒・若手教師の親的立場。広く、深い人間性で後輩教師を育て、生徒を導いてほしい。

最後になりますが、初任から定年まで、いつも若々しく、生徒と心が通じ合える（生徒からは、あの先生と話をしてみたいと思われる）教師を全うしてください。そのためには、常に「身体と心の健康」に留意し、身体的には老化しても、精神はいつでも高校生くらいのお構えで「活躍」くださいますよう念じております。

栃木県立真岡高等学校 野澤 正憲

## 男子たるもの厨房に入るべし

若い方々には当たり前のことかもしれないが、男子たるもの、週に四日は厨房に立つべきである。料理することによって、生活の基本を探求し、相手の心を考えて提供することの大切さを学び、節約・工夫・整頓を知ることになるからである。これを教育の原点と位置づけて考えてみよう。私の住む茂木町は、男性は一年のうち正月の三箇日だけ餅雑煮を作って、あとは厨房に入らなかつた。考えてみれば男女共同参画社会に反するような「男尊女卑」の裏番組は即刻粉砕されるべきであつたが、皆さんはすでに粉砕済みであろうか。あるいは女性が正月の三箇日だけ餅雑煮を作るという現象もアリなのであるか。メニューは自分で考える。味付けは吟味を重ねる。自己責任で継続する。厨房から出てその心をもって授業に臨むべきである。生徒に基本を探求させ、相手への思いやりを学ばせ、節約・工夫・整頓を学ばせる授業になること請け合ひである。

教員の陥りやすい畏は、気づかずに「評論家」になつてしまうことであろう。教師は自分のやつていないことを生徒に強要したり、自分のできなかったことかたまりの仇を生徒にとらせたりすべきでない。生徒個人にとつてよい学校生活とはどんなものであるのか、教師自身の経験を活かしつつ生徒の身になつて、よくよく考えてくれる教師に巡り会えた生徒こそ幸いである。現役の間、私はいささか授業の工夫をし、生徒の劣等感を払拭させる手立てを考え、クラブ活動に熱中しドロナワ的な研修をしたりもした。しかしこれらは十分であつたらうか。厨房から発していないから（生活の根本から発していないから）、ムラで

あつたり、無理をし過ぎたりしたこともあつた。そんな精神の有り様では生徒を心底からは納得させられない。五十歳を過ぎようとした頃、そんなことに気づき始め、私なりに、比喩ではあるが、食事を提供する精神を学習し直そうとした。

鎌倉時代の傑僧道元が中国に留学した頃、老僧が食材の買い出しをしている場に出くわし、「地位のあるあなたが、どうして食事の準備のような煩わしい仕事をされるのか」と問うたところ、老僧は笑つて、「東方の好人、未だ仏法を知らず」（東の国から来た良き方よ、あなたにはまだ仏法の何たるかがわかつていないようだ）と応じた。道元はこの時、「食事提供の仕方・食事の作法」自体が仏法そのものの実践であることを即座に悟つたのである。

定年退職し、私は鉄の規則をもつて、週に四日間厨房に入ることにした。（だいたい、こんな言い回しをすること自体、団塊の世代の遺物のなものでもない）はじめ家人は怪訝な面持で私を眺めていたが、私自身はしばらく続けるうち肩の力が抜けてきた。「次の食事は何だろう」というような家人の顔に出会ふのは無上の喜びである。これがあと三十年早ければよかつたのだ。厨房から発していたなら、私の子育ては、私の教育手法は、随分マシなものになつていただろう。自分にできなかったことの仇をとつてもらふことになつてしまう矛盾に満ちた拙文を親愛なる諸兄に贈つて、メッセージとしたい。

## 読んだ本について

自分が読んで他の人も読むと良いかもしれないと思える本を述べてみた。若い頃良いと思ったものと退職間近になってからのものでは大分異なってきたが、それはそれだと考えて書いた。

下村湖人の「次郎物語」

ユゴーの「レ・ミゼラブル」

夏目漱石の「こころ」

トルストイの「復活」

吉川英治の「三国志」

陳舜臣の「小説十八史略」

司馬遼太郎の「竜馬が行く」

司馬遼の「史記」

「次郎物語」と「レ・ミゼラブル」は中学生の頃、「こころ」と「復活」は高校生の時で大学受験の頃、「三国志」は大学生の頃、「小説十八史略」と「竜馬が行く」と「史記」は、教員になってから読んで良いと思ったもので、退職近くなった現在でも以前と変わらず読んでおくの良いのではと思っている本である。

夏目漱石、トルストイ、司馬遼太郎の書いたものは、相当数読んだが、いずれも大変興味を持って読むことができた。

「竜馬が行く」は、五十近くなって読んだが、若いときに読むべきで、進路を考える上

で参考になるかもしれないと思った。司馬遼太郎の本は、「坂の上の雲」や「翔ぶが如く」など多くが、日本史等の勉強にもなるのではと思う。

この頃は、図書館にも幾冊かおくようになったが、漫画も時々読む。自分は、手塚治虫の「火の鳥」などのSFや横山光輝の歴史物は大変面白いと思っている。

井上靖や山崎豊子等の小説は、読んでいるときは大変面白く良いと思えたが、今では昔ほどではないような気がしている。最近では、藤沢周平のものなども良いと思っ

て読んでいる。矢板東高校での球技大会の時、運動場で生徒の試合を見ていたときだったと思う。授業では全く教えていなかった生徒が、突然自分のところに来て、「先生やはりハンレイですか。」と言ってきた。自分が史記関係の本を読んでいるのを知っていて、話しかけてきたのである。当事者しかわからないような話で、なんとなく愉快な気持ちだった。大田原女子高校にきてからも同じようなことがあった。卒業した姉が読んだ本はほとんど先生も読んでいると言ってきた生徒がいた。最近では、コンピュータの発達で、バーコードを使うので誰が読んだのかわからなくなってきたので、このようなことはないようだ。

思いつくまま今までに読んだ本で読むと良いと思える本を書いてきた。読書はその時々その人の思いなど、様々な要因が絡んで良いと思うことになるのであろうから、単純にこの本が良いといっても難しいところがある。

ここに書いた自分の薦める図書も、別の観点から見ると、大分偏りがあるかもしれない。

## 部活動の楽しみ

大学卒業後に赴任した学校では、私自身が大学まで続けていた剣道部の顧問に就いた。この後の学校でも剣道部から離れたこともなく、多くの先輩や後輩や生徒や保護者と関わって私の生活は豊かになった。剣道部以外にも軟式テニス部と卓球部の顧問も数年務めた。運動部の顧問になると、実技だけでなく理論や歴史等についても学びたくなる。その競技についての興味関心が深まり、関係する事柄や他の競技についても知りたくなる。体育館や校庭のコートに毎日出かけていくと他の部の部員についても詳しくなる。授業中の教室にいた生徒とは少し違った姿を放課後は見られる。放課後の部活動中の生徒、特に運動部の部員は開放的で人と親しくなれる状態である。教員は放課後の生徒とできるだけ関わるように努力すべきだと思う。

教員になって三、四年たった頃、必修クラブが作られることになった。その頃は、大学時代に覚えた囲碁に夢中になっていた。部活動の指導をしてから、夜は碁会所に通い初段になっていた。この時は旧文部省は予算措置をしっかりとっていた。囲碁クラブの顧問になりたい教員を対象に影山プロの講習会を準備したりもした。このようなこともあって必修クラブが始まった年に、囲碁クラブの有志四人による囲碁愛好会ができた。この頃は、愛好会や新しい部活動を作りやすい雰囲気があった。この年には高校囲碁選手権も県予選会はなく、関東地区予選会が東京の日本棋院で開催され、生徒を引率して参加した。私にとってこの時から、囲碁は楽しみ以上の存在になった。この後の三十年以上の教員生活の中で多くの生徒と関わる手段となった。今では囲碁部のある学校も多くなっている。運動

部とはまた違っている文化部の生徒との交流は味わうべきだと思う。蛇足ながら囲碁が打てる仲間、年齢・職業を問わずに増えるもので、豊かな人生の一助になる。必修クラブにしっかりとした予算措置があったことは先ほど書いた。

また、私の趣味の一つに「篆刻」があった。「東京家会」という篆刻家梅舒適先生の指導を受けている会に所属していた。「篆刻」は書道の世界の一部として生徒もよく知っている。高価な印泥や印床等をクラブの予算で準備すれば、生徒の負担は極めて低くてすむ。「篆刻クラブ」は二つの高校で作った。集まる生徒の数は多くはなかった。しかし、「篆刻」を通して書道はもとより日本画等関係の方々とも知り合うこととなった。「篆刻」は、囲碁以上に私の交友関係を広げてくれた。

教員生活での楽しみは沢山ある。中でも、卒業後の生徒との交流は、教員生活の醍醐味であると思う。私の場合は、剣道・囲碁・篆刻の部活動・クラブ活動を通しての生徒との関わりが、現在に至っている例が多い。成人し、結婚し、親となった教え子と酒を酌み交わしながら、種々のスポーツを話題にし、芸術談義をし、囲碁を打ち、将棋を指す。教科以外を、頑張ったというより楽しんだ結果である。現在は部活動も種々の制約や問題も起きやすくなっている。得意な部活動を指導する教員ばかりではないことも承知している。しかし、学校教育の現場は教科指導だけではない。教科以外の場での生徒との関わりも、大切に積極的に持ち続けてみると、大きな楽しみもあると思う。

## 趣味を持つとう

私は、在職中多くの方々にお世話になり、この三月末に無事定年退職した。現在、真岡にある井頭公園で「緑の相談員」として勤めている。私は、長年農業の教員として、生徒たちと農場で汗を流しながら、野菜や草花作りの指導に当たってきた。それらの経験を生かし、緑に関する相談活動を通して、県民サービスに少しでも寄与できればと考えている。しかし、幅広いジャンルからの質問事項があり、自分の知識の無さを改めて痛感させられている。日々勉強だが、新たな事柄、そして各種講座を担当する講師の方々や友の会会員との出会いがあり、充実した勤務をさせてもらっている。

現在、我が国では、時代の急激な進展に伴い、子どもたちを取り巻く環境が大きく変化してきている。その結果、世間をゆるがす事件・事故が続発しており、日本の教育制度そのものも含め、さらなる改革の必要性が声高らかに論じられている昨今である。

そのような中、教育現場で日々頑張っておられる先生方に改めて敬意を表すと同時に、今後とも本県教育発展のため、是非とも健康に留意され、常に前向きな姿勢を失わずに教育に当たってもらいたいと考える。

先頃、下野新聞に病気等で休職する教職員が年々増加しているという記事が出ていた。私は、最後の七年間、管理職として先生方に接してきたが、年々先生方の負担が多くなってきたため、定期試験や長期休業中に、できるだけ休暇を取り、日頃の疲れをとるよう勧めてきた。

また、最近、経済的理由ばかりでなく授業料や諸会費の納入が滞り、完納まで、多くの

時間と労力を要している。また、学校側の教育方針を理解してくれず、何かと苦情を言ってくる親も増加している。そのため、トラブルが発生すると、解決するまで多くの時間を要し、先生方にとって、精神的にも肉体的にも大変な負担になってきている。この様なことでストレスが溜まり、日々の仕事の疲れも加わり、体調を崩す先生方が多くなっており、優秀な人材を中途で失うことにもなりかねない。

そのために、先生方の負担軽減のための諸施策の実施と併せて、できるだけ仕事を家庭に持ち込まず、また仕事のことを忘れて家庭サービスや自分の好きなことに打ち込む趣味を持つとよい。そうすることで、精神的・肉体的疲れをとり、リフレッシュして勤務することで、より良い教育が実践出来るはずである。また、自分の人間としての幅も広がり、また、新たな人間関係ができ交友の幅も広がるはずである。

私にとって、趣味の「野菜づくり」が、精神的疲れをどれだけ癒してくれたことか。

現在も、早朝より、野菜や草花の栽培管理をしてから勤務するのが日課で、大変充実した日々を過ごしている。「食の安全」が叫ばれている昨今、家族にも大変喜ばれており、体の続く限り、このこだわりの「有機野菜作り」に励みたいと考えている。

常日頃、激務が続く先生方が、自分の打ち込める「趣味」を持つことによって、疲れを癒し、日々健康で、各自の持てる力を十分に発揮し、本県教育がより活性化されることを期待し結びとします。

いよいよ、三十有余年の教員生活に別れを告げる。部活動の顧問として、バドミントンでインターハイに出場できたことや、宇南高選抜準優勝の時には選手とともに甲子園で半月以上過ごせたことなど、生徒たちとともに感動を共有する機会にも恵まれた。

さて、私はこれまで日本史を中心に授業を担当した。趣味が旅行であることを活かし、教科書や副教材が登場する遺跡や仏像・絵画などの文化財を、この目で実際に見ることによって、よりインパクトのある授業が展開できないかと思ひ、できる限り現場へ足を運ぶとともに、たくさんのお宝や重要文化財を見学した。京都・奈良には何回訪れたかわからない。京都の祇園祭をはじめとする年中行事や、東大寺お水取りの達陀たつたの行、春日若宮のおん祭りなどを間近に見ることができた。また、奈良博で開催される正倉院展も、比較的見学者の少ない金曜日の夜をねらって見学した。さらには、駅レンタカーを利用して全国各地の遺跡や文化財を見学して回った。歴史地理という分野があるが、日本の風土は北海道から沖縄まで様々で、それらが生活にも大きく影響している。九州では道路の案内板には必ずといってよいほど、ハングルの表示があり、韓国との距離を実感できる。このころは、日本各地どこに行っても同じような住宅、同じ名前の店が通りを埋め尽くし、地域差が感じられないが、昭和五十年代ぐらいまでは各地で特色ある風景を見ることができた。このほか、東京の博物館・美術館で開催される展覧会にも、毎年何回もせっせと通った。お陰でその都度購入したカタログの処理に、今では困っている始末である。

最近では、趣味と実益を兼ね、日本史との関係の深い中国や、憧れの地であるシルクII

ロード、興味惹かれるイスラーム教の国々の旅を始めた。美しい風景や、現地の人との交わり、各地の食を求めている、遊ぶ要素の強い旅である。しかし、学ぶことも多くあり、「百聞は一見にしかず」という言葉を実感している。風土や気候などあらゆる環境が、その国の歴史の成り立ちに大きく関わっており、歴史を広い視野から見取る必要性を改めて思う。

これら以外の資料収集として、受験指導から得られたものも少なくない。各大学の日本史の専門家が作成したと思われる、大学入試問題の中には、示唆に富む内容が多く含まれている。問題文そのものをじっくり読むと、実に参考になる点が多い。また、長年進路指導に携わったことから、予備校などの研究会にも参加する機会が何度かあった。ここまでやらなければいけないのかと思うほど、問題分析などに凄まじい力を注ぎ込んでいる。また、多くの人と接することにより、日本史教育の現状や問題点を知ることができたし、入試問題作成に関する基本的な方針を聞くこともできた。さらに、中には疑問符を付けたくなるようなものもあるが、予備校のテキストも参考になる。

このほか、毎月発行される『日本歴史』を定期購読してきた。学会の動向を知るため、また多少なりとも専門性を持ち続けたいとの願望からである。

私なりの資料収集、教材研究の方法を示したが、これら得られた知識を通して、いかに生徒たちに感動を伝えるか、生徒の興味・関心を惹起させるかが問題となる。授業を組み合わせるうえで、周辺知識やエピソード的な話も必要となろう。

教壇を去った後も、遊を第一とし、学ぶことも忘れず旅行を楽しみたい。

## 部分の充実を全体へ

○ たまにゴルフに行きます。上手ではありませんが好きです。

少し時間がとれるようになったので、五月、風薫る中、コースに出ました。

緑滴るといふのはこういうのを言うのでしようか。白に近い淡い緑から緑そのものまで、あらゆる緑が少しづつの差で連なり重なっています。一本一本の木が自分だけの緑の色を誇り、それでいて調和しあつて見事な美しさを作り上げています。この日はお天気もよく、風も光も池の水までもが協力しているようでした。本当にきれいだなあと思いました。一本一本の木が個性を発揮し、それらが相乗的に高め合い、全体として美しい景色を作り上げている。学校の教育活動ととても似ているように思いました。

○ 冬師走、京都の桂離宮を拝観しました。

春や秋は混んでいるし、時間の余裕もないので、冬ばかりこれで三度目です。「冬のはうが木の葉が落ちて、樹木や石の配置などがよく見える。通の仁仁はこういう時に行くものです。さすがですな。」などと冷やかされ、慰められて行きました。

控室で待たされ、心を落ち着かせて入ります。

池に映る松琴亭のたがずまいや襖の斬新な市松の意匠。笑意軒の田舎を思わせる風情。

そして、端正な書院の雁行の配置、白壁と柱の対比。月波楼からは、名月の秋はいかばかりと想われる池泉の眺め。また、通路は楷、行、草の石畳が歩を楽しませ、景色に心持ちを合せてくれます。

こうして見ると、それぞれの建物がそこに個性あるひとつの景色の美を作り、月波楼が

それらの扇の要となつて、調和のとれた全体美を見せているように思えます。部分が部分として一つの美を作り、全体として統一された美に昇華されています。

○ 今、教育界は課題が山積し、学校現場も多くの問題を抱え、対応に追われています。また、外部の要望や批判も多く、教員の多忙感、疲労感は大変なものがあるといわれています。しかし、そうはいっても、学校では目の前の子どもたちになにもせず、手をこまねいているわけにはいきません。

生徒のため何をすべきか、何ができるか。学校の各部分部分が力を発揮し、学校全体としての充実を図るしかありません。

そのため、言わずもがなですが、しいて挙げるなら、まず第一に授業のための教材研究が重要です。授業は教員の生きがいです。授業の主体は教員であり、生徒ではありません。自分の専門に自信を持って、生徒を引っ張っていけばよいと思います。そのため教材研究です。

二つ目は学校行事の企画と指導。生徒と一緒に考え立案し、実行する。共に汗し、一体感を持ち、思い出を共有する。まさに教員の楽しみです。

三つ目は各部の運営。教員同士の仲間意識を感じ、教職に就いたよろこびを見出すところ。先輩から知識と経験を学び、後輩からは新しい感覚と刺激を受けます。

○ 教員が、学校現場のそれぞれの分野（部分）で「生きがい、楽しみ、よろこび」を感じて、充実の時を送るなら、学校は全体として素晴らしい力を発揮すると思います。

専門を貫く



## 音楽が与えてくれた出会い

高等学校芸術科・音楽を、教師として「いかに教えるか」については、これまで多くが語られ、実践されてきているが、未だにこれぞといわれるものが見当たらない。社会の急激な変化に対応しながら、教育のあるべき姿を考える時、芸術教育の必然性を感じるのは私だけではないであろう。多くの生徒たちと出会った三十八年間を振り返り、これからの自分の励みとしたい。

「何だ、お前か。サボッたら怒鳴るぞ。」新任校の校長は高校時代の恩師で、一瞬驚いたが温かい励ましの言葉でもあった。学校は環境が良く、先生方は気概に満ちていて、生徒が素直で生き生きと生活する姿を見ると、すぐに学校が大好きになった。教師としての第一歩を、このような中で踏み出すことができたのはありがたかった。

茂木高校での四年間は、全てが手探りであった。新採研修での指導案が手元にあるが、どのように授業を展開したのか思い出せない。校歌の伴奏も苦労した。前奏が無かったの、一斉に歌わせるのに途惑い、最後のフレーズを前に置いて前奏にした記憶がある。部活動は合唱・吹奏楽部を指導した。今思うと、どちらも満足できるものではなかった。ただ、生徒は無心でついてきてくれた。両方の部から教師を志す者が出て、担任と共に初めての進路指導を行ったが、改めてその重大さを思い知らされた。二人は今、音楽教師として勤めている。指導力不足をどうカバーするかは、大いに悩むところであったが、まずは生徒との信頼関係を築くことと考え、自分の持てるものを全てをぶつけた。小中学校の先生方からも、地区の音楽祭等を通して、多くのことを学ぶことができた。

生徒との接し方を教えられ、部活動指導の基礎的なことを身につけて、今市高校での勤務が始まった。それは思い描いていたものとは違い、新しいスタート地点に立たされたようであった。『所変われば：』であり、『郷に入りては：』の心境である。新しい集団にどう入っていけば良いのか、生徒にとって魅力ある教師とは。生徒たちの要求に応えるべく、それまで以上に自己研鑽を積み、前任の先生が築き上げた音楽のレベルを何とか維持しようと、生徒と共に長い時間を費やしたものである。今思うと長いようで短く感じられる十四年間であった。音楽への道を勧めたことは無いが、十余名の卒業生が、音楽の教師として頑張っている姿を見ると、在学中に何らかの影響を与えたものと思う。

宇都宮女子高校に異動すると、別の分野での力が必要になった。オーケストラ部の指導である。同じ音楽でありながら、いざ指導となると、それまでに得たものでは対処できないところがあり、必死になって勉強した。音大進学希望者の授業、毎年暮れに行われる『第九演奏会』の準備、二〇〇名近い合唱とオーケストラ部の指導、どれも生徒にとっては大切なものであり、手抜きなど許されるものではなかった。十四年間、最後まで持ちこたえてくれた自分の体に感謝したい。

宇都宮東高校での六年間は、校歌をしつかり歌わせた。少しだけゆとりをもって接することができた。校歌を大きな声で歌うことが、学校を勢いづけると信じている。新任校では校歌の指導に苦労したが、どの学校でもしつかり歌わせたと自負している。音楽の不思議な力は、子どもたちの心を豊かにし、ひいては、人間としての在り方を教えてくれるものと思うのである。

## 振り返れば反省することばかり

いろいろと指導をいただいた先輩や同僚の先生方に支えられ無事定年を迎えることができました。多くの生徒たちとの出会いには特に感謝しています。

教員としての仕事を総括すると、部活動と教科の指導に集約されます。野球部の顧問として小山高校で野球を十年間やれたことは、貴重な経験でした。途中で商業科の学科再編が、国際会計科の設立準備のために野球部の顧問を辞めなければならなかったことは、今でもとても残念に想い出されます。その後、卒業生が、オリンピックで金メダルを獲得したり、プロ野球界で活躍し、十分に楽しんでいました。

また、国際会計科での教科指導や学科の運営でも、何物にも代え難い充実感を味わうことができました。徹底した学習指導を中心とする学科の特色づくりが、保護者や地域の方々から評価を受け、商業学科からは不可能と言われた難関大学への進学も定着させることができました。英語と国語は、本県の有名進学校に負けない実力を定着できたことは奇跡的なことでした。専門科目の簿記や会計の学習では、大学卒業レベルといわれる日本商工会議所の簿記検定一級に、九名の生徒が合格してくれました。その反面、英文会計の導入には苦勞をしました。今でこそ会計基準の国際化が図られています。二十年前にはその重要性をなかなか理解されない状況がありました。日米の仕入原価の計算ひとつとっても会計処理が異なり、ダンピング違反の「おとり捜査」に利用されていた時代です。大企業の営業マンが逮捕された事件は、会計を指導する者として大きなショックを受けました。生徒たちが社会に出て活躍するのは二十年後ぐらいからです。教育内容が時代の後追いに

ならないよう、未来の社会が何を求めるかを常に考えていなければなりません。

社会の要請は、小さな事実よりも最大公約的なものに傾きます。少子高齢化と高学歴社会への対応としては、専門性を探求する専門学科よりも大学進学のための普通科へと学科編成が行われ、小山高校の商業科および国際会計科は平成九年度で幕を閉じました。グローバルizmの下で社会のニーズはますます多様化が進みます。やがて専門教育の見直しの時代がくると信じています。単一の学習内容ではとても対応できないからです。総合学科の誕生はまさに多様化への対応の一步ですが、とても十分とは思えません。

定年までの十年間は、宇都宮商業高校で働くことができました。教職員の取り組みと生徒の頑張りで、平成十八年度に、全商協会主催の検定で、三種目以上の一級合格者(一七四名)が全国一になりました。日商簿記の一級合格者六名の学習姿勢は今でも忘れません。簿記部の生徒たちが全国準優勝に輝く姿もしっかりと見ることができました。

教職の二十年は、簿記の高度資格の取得を中心に指導をしてきました。日商簿記一級の難解な学習内容は、強い学習意欲をもって挑んでも容易なものではありません。複雑で高度な内容に、何度も限界を感じながらも頑張っている生徒の姿はとも美しいものです。

人はそれぞれ能力に違いがあります。しかし限界に挑戦して乗り越えたときに得られるよるこびは一緒です。学習することがより大きな人間性の成長に結びつくように指導したいと考えながら、何もできなかったことを深く反省しています。

私は専門が工業の土木でしたが、大学を卒業してすぐに教員になったために、実際の建設業界のことを経験せずに教員になってしまいました。したがって現場の具体的な話をできずに生徒たちに指導して参りました。私自身この「現場経験のなさ」を教員生活の中で如何に克服し、生徒たちに自信をもった指導ができるかが大きな問題でした。

幸い最初に赴任した真岡工業高校では、仕えた土木科長が現場経験をされた方で、現場のやり方を取り入れた指導をされておりました。私も生徒と一緒に必死に学ぼうと生徒たちと競争しながら土木実習をしていたことを思い出します。また、土木製図は単に図面を写図させているだけでは実際の土木構造物の理解はできないだろうと、土木科で図面に沿った模型を製作しました。実習室の片隅に科職員がそれぞれの休み時間に分担箇所を作つていき、自分が遅いと放課後残つて作つたりと職員同士も張り合いながら模型を作製したことを覚えています。おもしろいもので実習室に出来上がった模型が次々に陳列されていくと、私たちも達成感を味わいそれがまた次の模型製作に挑戦するということになりました。今はコンピュータで3次元CADを使い簡単に構造物を見せたりできるようになり、製図の指導も楽になってきていると思います。当時、学校の職員構成は若い人たちが多く、部活動の指導の後や独身会などでよく飲んだりしました。宿直があつた時代で、先輩教員と泊まつたりしたときに、苦労話や有益な話をしてくれられたことが勉強になりました。今思ひ出すとそれぞれが楽しく学べた暗黙の新米教員への研修だった気がします。

その後、県北の那須工業高校（現在の那須清峰高校）に転勤になりました。私自身、同

じ工業高校だからそんなに違わないだろうと思つて転勤しましたが、芳賀郡と那須郡の地域性の違いや教育課程の違いによる学校の違いなどを転勤して初めて経験しました。「異動は最大の研修である。」と言ひならわされていることが本当だと知つた時でした。那須工業高校には二十二年間お世話になりました。その間、学科再編により商業科が増設され、土木科も建設工学科に再編されて校名が那須清峰高校になりました。その時に実習棟改築がありました。古い実習棟からプレハブの実習棟への移動、続いて新実習棟完成後にまた移動と、科の先生方や生徒たちと協力し合いました。校長指導のもとに各科の先生方と連携しながら実習棟改築に携わることができたことは私のよい思い出となりました。

その後、真岡工業高校、栃木工業高校と転勤し、教員生活最後の四年間を足利工業高校で過ごしました。足利工業高校では創立百十周年記念事業に携わることができました。教職員はじめ、同窓会「栃工会」、PTAの皆様のお陰で記念事業も無事行うことができました。その時姉妹校締結したドイツの実業高等専門学校に生徒と訪問してきました。ドイツの工業技術の高さは、「マイスター」の固らしく、基礎からしっかりとした工業技術の指導が支えていることを知りました。また、熱心な指導は日本だけではないということを知り、これからの日本の工業の発展に、先生方の役割は大切であると思ひました。足利工業高校でも、多くの方々が大変お世話になり教員生活の最後を送ることができました。

最後に、私が先輩から生徒に向かうときの心構えを教えて貰つた、山本五十六の言葉「やつてみせ 言つて聞かせて させて見せ ほめてやらねば 人は動かじ」を皆様にお送りしたいと思ひます。

## 家庭の教育力を高めるために

長い教員生活で親子を教えた時、子どもは「先生は、私のお母さんを知っているんですね。お母さんの高校時代はどうでしたか。」と自分の母親が自慢している事を確かめるように質問し、お母さんの方は「私の子は、とてもいい子なんですよ。よろしくお願ひします。」と誇らしそうに話すとき、一人の家庭科教師として、私はとても嬉しく教師冥利を実感した。

家庭科教育には、自己表現を図って生き生きとした人生を送り、家庭・家族の機能を生かすとともに情報を適切に活用して生活を創造する力を養い、国際社会に生きる心豊かな人間として生活していく基礎基本を身に付けることが求められている。すなわち未来の家庭建設者として生活の自立能力・経済的自立能力・精神的自立能力(心の安定)・コミュニケーション能力の育成が必要である。この目標を達成するために、知識・技術の習得は言うまでもないが、特に習得した事を実践しようとする態度・意識の高揚を図ることが大切である。そのためにはどうしたら良いか、また学んだことを生涯にわたって生きた力にするためにはどうしたらよいか思索しながら教えてきた。心に響く家庭科教育を目指した。一つめとして、人間にとって家族・家庭生活の大切さ・在り方・親の在り方を自覚し、家族・家庭の人への感謝の気持ちを持つように意識して指導することが大切である。祖父母・両親・兄弟姉妹の感謝はもとより、今まで関わりがあった人、支えてくれた人、お世話になった人達に感謝する気持ちを持つことを教えた。「ありがとう」「お世話になりました」という感謝の気持ちを持つことにより、高校生の多感な時期に親とのコミュニケーション

ョンを持つことになり、一段と精神的に成長していくことを確信している。

二つめとして、心豊かな人間を育てるために、家庭科では体験学習を通して感動する心や自他を愛し、共感することのできる心を育成し、自尊感情を育む事ができる。さらに実験・実習等のグループ学習をとおして協調性やコミュニケーション能力を育てることがができる。生徒が体験活動や実験・実習で感動体験をするために緻密な計画をたて、過程で失敗することがあっても成功体験を味わうことができるように工夫することが大切である。保育実習では、子どもと接するのが楽しいと感じるとともに、自分がかげがえのない存在であることを実感した生徒が多い。家事手伝いでは「年末の大掃除を家族みんなで、できたことがとても良かった。家族のコミュニケーションがとれ、家族の素晴らしさを再認識できた。」の感想があった。感動することは、今後の活動への意欲に通じ、自尊感情を抱き、目標達成の原動力となった。

さらに習得した家庭科の知識・技術を自分の生活の中で実践するために、創造・愛情・奉仕・勤労の精神を養うことが大切である。その基本になっているのが規範意識の確立とその実践である。例えば、挨拶ができる・親切である・返事ができる・他の人に尽くす・掃除をきちんとする・正しい姿勢であるなどを身に付けさせておく必要がある。

教師は学校では親の存在であるので、生徒の良いところを引き出そうと、誠心誠意接し、最善の努力をして、生徒の指導に当たることが大切である。生徒が自信をもち、二十一世紀を担う、かけがえのない一人の人間として自立し、立派な親になることを期待する。

## 「生きる力」をはぐくむプロジェクト活動

「生きる力」とは、「自ら考え、学び、行動する」「共に協調し、豊かに生きる」「たくましく生きる」などとされている。そこで「生きる力」をはぐくむ農業教育の役割は、意欲的に学び、基礎・基本を確実に習得し、自己教育力を育成し、資質の向上に努めるなどとされている。ところで、プロジェクト学習法は、自ら課題を選定し、計画を立て自ら実施し、その学習内容の結果を自ら反省・評価するという四段階を踏む学習法であり、「生きる力」をはぐくむ良い手法である。

この活動を通して問題のとらえ方や解決方法などについて学習し、理論的、科学的な考え方に立つて見つめ、想像力を身につけることができる。いわゆる普通高校での知識や効率だけの評価中心のカリキュラムに加え、価値観以外の想像力、探求心の向上に、大いに近づくことができると思われる。そして、この課題は農業教育の主たる答申課題になっているが、農業教育の現場では多くの問題点をかかえているのが現状である。一年次の「農業科学基礎」二年次学科の中核となる専門科目、そして三年次「課題研究」「総合実習」へと段階的、継続的にプロジェクト学習に取り組ませる。特に三年次の課題研究は自ら課題を設定させ、自主的な活動に基づき取り組ませれば、生徒自らの自主性を育て、意欲的に農業学習に目を向けさせることができる。その結果、より多くの問題を解決する資質や能力が高まり、生徒一人ひとりに自信が生まれ充実した学習活動が推進される。

農業科学基礎の教材研究は、プロジェクト学習の意義や生徒の興味関心を抱かせるための重要なポイントである。ダイコン、ハクサイなど、一年生だから簡単に失敗しないもの

が教材として導入される。これは体験学習を主にした観察的な学習手法である。しかし近年、小・中学校では総合実習の授業で、スイカ、ミニトマトなどの教材を取り入れ、素材や観察記録も高いレベルで行われているため、一年次の教材は、「高級ネットメロン」「養液栽培」などの従来の三年生の専攻学習で取り入れられた、「高度」「先端技術」などの教材を導入した。さらに「農業系学科」などと問いかけて、「その結果自ら育てたものが出来た」「何となく農業っていいな」「普通教科より楽しい」などと、農業学習の良さを教え、生徒一人ひとりに中学時代に描いていた農高のイメージをチェンジさせる「大切な第一歩の授業」にすることができると思う。こうして農業科学基礎は農業科目を展開する入口としてもう一度見直し、「地域の特産品」や「達成感を抱かせる物作り」などを取り上げ、創意工夫する必要がある。

当地域は、「首都圏農業」の中心としてイチゴなどの園芸産地が形成され、生産性向上を目指した施策が展開されている。その中で農業高校と地域農家との連携は大変重要である。そこで地域農業の抱える問題点を学校に持ち寄り、農家と共に創意と工夫を活かした研究活動を進め、地域に開かれた学校づくりに貢献している。そして、研究成果は農業クラブプロジェクト発表会、論文コンクールなどに参加させ、多くの賞を受賞することができ、生徒たちの自信と誇りにつながっている。

特別支援教育の世界にはいろいろな〇法がある。私も三十八年間の教員生活の中でたくさん〇法に出会ったが、ほとんどは自分に納得できるを取り入れるというやり方で素通りしていった。しかし、中には、ずっと私の教員生活を支えるものとなった方法や考え方ができる、かなり普遍的なものを含んでいた。その普遍性は、人としての心や体の発達が基礎にあり、生理学・神経学的な観点で納得のいくもので、一般の幼保、小中学校、高等学校にも当てはまるものではないかと実感させられた。その中でも次の考え方、子どもの見方はごく当たり前のようなことであるが、つい見落としがちなことであると思う。

①人は心(認識)と体(実体)をもち、その両方で成り立つこと、及び心と体の関係。人は外界からの刺激を耳や目、皮膚等体を通して取り入れて心を形成していく。心は体を通してしかつくりられないものである。またその心は体を通してしか表現されない。従って子どもの心を理解しようとするときには、体の各器官を通して理解することになる。私たちはどうしても表現体としての子どもの体(姿勢や体の動き、口を通して出る言葉等)そのものに左右されることが多い。しかし、大切なのは実際に子どもに何がイメージされ、描かれているのか、その心を見ることである。それは子どもに働きかける際にも言うことで、自分たちの働きかけにより子どもの心に何が描かれるのかを常に留意しなければならぬ。意外だったのは、子どもに体の動きを教える場合は、ただ手取り足取り教えるのではなく、子どもの心に子ども自身が動いている体の感じを描かせることができたか

決め手になることであつた。動かされたときに子どもがどう感じるか、実際に子どもになつて動かしてもらおうと心に描かれる動きのイメージが大きく違ってくる。これには目からうろこが落ちた感じがした。わずかな働きかけ方の違いで、子どもが自分で動かしたとイメージできるような支援ができるのである。人はこのような心と体をもつ。このことを基本として理解しておきたい。

②人は生物体として的一般性と一人ひとり違った生活の中で形成される生活体としての個別性の両方もち、その両方からバランスよくとらえていくことが大切であること。障害に応じた適切な教育やそれぞれの個性を尊重した教育が重視されることは大切であるが、それだけでなく、どんなに特殊な事情がある子どもでも、人としての教育が重要になる。一般的な社会の中でのルールや人としての在り方と、その子に応じた一人ひとりの特殊性や個性の両面をいつも意識したアプローチが大切になってくる。

③動くこと・活動することだけでなく上手に休むことも一緒に教えたいこと。よりよく動ける子どもはよりよく休むことができる。うまく活動できない子どもの中には睡眠も含めて、うまく休めない子どもが多い。とかく動くこと・活動することに目が向きがちであるが、上手な休み方も視野に入れていく必要がある。このことは、特に現代の一般社会人にも通じることで、最近よく見かけるようになった休むためのいろいろなグッズの中にも、十人以上前から特別支援教育の中で考案された物が多いように思う。

これらは普遍性といっても、ごく当たり前のことの一部である。こうした当たり前のことを見直すことで、本当に大切なことが見えてくることがあると感じている。

私が取り組んできたことを振り返って

私の専門は電気工学である。大学で教職を学んでいる間に、工業技術を生徒に教えたいという気持ちになり教員になった。初任者として勤務したのは、N養護学校であった。工業科の教員として、この学校で何ができるんだらうという不安なスタートであった。高等部に所属し、「数学」を担当した。大学時代に数学教育にも興味を持っていったことが幸いであった。障害のある生徒たちとの出会いであったが、理解力の高い生徒もおり、高校の教育内容を授業で展開することができた。また新しい教育内容である行列やベクトルのテキストを独自に作成し、指導することができた。初めの卒業式は、涙の別れであった。二年目には、自ら希望した重度障害児の算数教育に取り組んだ。そんな中で子どもたちが理解するとはどのようなかを知ることができ、その後の教員生活で大きな経験となった。今、振り返って見ると、教材を工夫したり、様々な教員や子どもたちと出会いを通して、貴重な経験ができたことが忘れられない思い出である。

その後U工業高校に異動し、工業教育に取り組むことになった。精密機械科への配属であったが、興味ある分野が沢山あった。当時導入されたばかりのNC工作機械や計測制御技術、そして空気圧制御の実験装置の製作などを通して、工業教育の楽しさを味わうことができた。また電気関係の授業も希望し、週二十八時間の授業に取り組んだ。五年目となり、専門の電気・電子科への配属となった。当時はミニコンが導入されており、その教育に興味を持った。先輩の高度な技術に出会い、自分もコンピュータシステム設計などの高度な技術を身に付けることができた。アセンブリ言語で円周率 $\pi$ や自然対数の底 $e$ の値の

計算をする経験もできた。まもなくマイコントレーニングキットが登場し、その教材の開発と教育実践は、忘れられないわくわくした思い出である。優秀な生徒のシステム開発力の高さに驚かされたこともあった。次にT工業高校の情報技術科へ異動し、パソコン用OSの時代(CP/M, MS-DOS等)の教育環境を開発する必要性を感じた。教育用マイコンボードの設計をし、一人一台のマイコン製作とOSを活用した教育に取り組んだ。事務員に相談し、ロムライターを購入できたことも幸運であった。マイコンはテキストと共に全県下の情報技術教育に利用され、初期のロボット教育へと発展してきた。また内留教員(計五名)の指導に取り組むこともできた。その後、S高の新設学科である情報制御科の立ち上げを担当し、それまで実践してきた技術教育を集大成した学科を設置するという大きな経験ができた。新設学科では、独自の教材の開発を多数行い、学科を発展させることができた。教育環境を整備することで、多くの生徒の教育や教員の研修を現場で行うことができた思っている。

以上、私がこれまで取り組んできたことを概観した。教員は、絶えず研究と修養に努める必要があるといわれる。また技術の発展もめざましく、絶えず次の時代へと教育内容の改善を図る必要がある。大切なことは、自分の研究した教育内容を同僚に公開し、さらに生徒の教育へと実践し、新たな問題点を発見し、改善を図るという繰り返しに取り組むことである。そのような中で教員としての充実感を味わうことができ、わくわくした教員生活を送ることができるものと思う。教師が現場で互いに協力・信頼し合い、絶えず学んでいることが新たな教育への意欲となり、学校の活性化が図れるのではないだろうか。

栃木県立栃木工業高等学校 角田 重雄

## 高校時代の思いを貫いて

私が音楽教師を志すことになったのは、高校時代の音楽の先生、清水先生との出会いからでした。中学時代に親の承諾が得られずに、一度あきらめていた音楽でしたが、清水先生との出会いが、私の心に火をつけたのでした。

清水先生が音楽について語る時、音楽がどんなに魅力的なものか、先生のお言葉や表情から溢れ出ていらつしやいました。高一の私は、音楽の限らない魅力に引き付けられ、親を説得し、この道突き進むことになったのです。この自分自身の体験が、私の音楽指導の基盤となりました。まず、自分自身が心から音楽を愛好している姿を生徒に伝えよう。決して派手ではありませんが、恩師から学ばせていただいた音楽教師の姿勢を、授業で貫いてきました。

一校に一人しかいない音楽教師は、大なり小なりの孤独を味わっていることと思います。私の赴任二校目では二十四年という長い在任期間でしたが、その中には極端な騒がしいクラスや、どうにも声を出さないクラスがあり、奮闘した時期は孤独を味わいました。

騒がしいクラスを持った時期は、学校内の問題行動が多く、落ち着きのない生徒が幅を利かせておりました。私には、厳しく恐さでねじ伏せるだけの力はなく苦勞しました。女性であることの限界も感じました。授業が終わると疲勞困憊するほど大声も出しました。若かった私には、これといった特効薬はありませんでしたが、心に誓っていたことがありました。それは、生徒に言ったことは必ず守るということでした。躰をしなければならぬいクラスに対し、脅しだけの実行できない言葉は言わず、「こういう場合はこのようにす

る」と、生徒に指導の約束を納得させておいて、それを必ず実行しました。また、大きい声で歌えば八十点あげると、生徒の意欲を誘いました。そして、八十点をクリアした生徒を、発表し誉めました。そして、叱った後も、心を切り替えて、「音楽って素敵でしょ」と誘い続けました。この経験は後に母校で生徒指導部長という、音楽と全く似合わない役を引き受けた時、とても役に立ちました。なんのために指導するのか常に生徒に納得させて指導しました。そして、音楽の授業には心を切り替え、音楽教師の姿を貫くことにより、役割を両立させることができました。

騒がしいクラス以上に悩んだのが、声を出さないクラスでした。授業は真面目で静か、しかし、どことなく自信がない。率先して声を出す生徒がいない。情熱があれば必ず通じると、奮奮しましたが、空しさだけが残りました。大きい声で歌えば八十点あげるという給も役には立ちませんでした。険悪なムードにしないと心に誓い、他のクラスより情熱を込めて指導しました。その頃始めた腹式呼吸の指導は有効な手立ての一つでした。息を吸いながら腹を膨らませ、息を吐きながら腹をへこませる。男子生徒にはできませんが、一人ひとりの生徒の腹に手を当てて指導しました。これは生徒にとって具体的な目標となり、生徒個人と接することができました。また、歌唱テスト時には、一人ひとりのいいところを極力誉め、その生徒にあったアドバイスをしました。この、個に働きかける根気強い指導により、先の灯りが見えてきたのです。

現在母校で、教師としてやり甲斐のある毎日に、幸せを感じながら過ごしています。

## 体験させたい「ドキドキ・ワクワク」

理科教育には研究活動を

初任校では卒業生を送り出すと他校視察に行けた。私は日本学生科学賞選集や東レ理学賞受賞作品集で巡り会った、大阪府立大和川高校の西川友成先生の授業を見学させて頂いた。先生は自習用教材と実験を基にした「デイスカッションスタイル」の授業をされていた。鋭い発問、活発なやりとり、生徒の鍛えられた観察力・発表力に私は圧倒されてしまったことを今でも鮮明に覚えている。

ガリ版刷りの教材を頂き、これを使用した授業を試みたが、西川先生の意図したことがうまく生徒に伝わるはずもなかった。教材は自分のことばで言い表せるまでに研究し尽くしたものでないかと心に残まれないと痛感した。そこで、毎年一テーマを決め、実験を主にした徹底的な教材研究をしようと決意し、着実に実践した。

部活指導の楽しさ

研究テーマの選定は生徒だけでは難しかった。そこで、身近な自然現象や教科書の内容について、疑問をやりとりする中からテーマを決めてきた。また、研究の過程で新たなテーマが見つかることも多かった。高校生には難しいと思われる内容でも、関連する理論や公式等を示すと柔軟な頭脳は思いもよらぬ理解力を発揮するもので、考える楽しさ、どきどき、わくわく感を一緒に体験できた。

研究発表は日本学生科学賞審査会と日本化学会春季年会に合わせた化学クラブ研究発表会で行ってきた。化学クラブ研究発表会では著名な先生方の前でのプレゼンテーション

や質疑応答、ポスターセッションなど学会と同様な体験をすることができた。その際に講評や研究の進め方についての学問的、技術的なアドバイスを大学の専門の先生から文書で頂いた。このような活動は科学の面白さを知り、目的意識をもって意欲的に勉強や研究に取り組む生徒・学生を大学と連携して育てていく一つの形として、今後より一層盛んになることを切望している。

情報の入手

化学関連の情報の多くは日本化学会化学教育部会の会誌「化学と教育」から得た。また、日本化学会では実験講習会・教育懇談会・化学実験講座等も開催しているので、積極的に参加した。そこで行われる研究者の講座・実験には毎回驚嘆することが多かった。

もう一つは、アメリカ化学会化学教育部会の「Journal of Chemical Education」誌の購読である。世界中から投稿があるため「これは明日の授業にすぐ使えるな」というような実験やヒントを多数得ることができた。また、本誌の過去の論文がインターネットを通じて全て閲覧できるため、自分の勉強や生徒の研究指導に大変役立った。

おわりに

生徒の理科離れに対し様々な対策が検討されているが、何よりも大切なことは毎日の授業や実験、課題研究や理科の部活動などを情熱をもって指導することである。そして、科学の面白さを多くの生徒に強く感じさせることだと思っている。

## 退職に思うこと

理科の実習助手として仕事に就いてから三十数年。昨年以來、「退職」という言葉も自分のものとして受け入れ、「立つ鳥後を濁さず」のたとえどおり、危険薬品の整理、設備、備品の管理、戸棚の整理と進めていた折り、この原稿の依頼でした。

私を最初に迎えてくれた学校は、普通科三クラス、農業科一クラス、家政科一クラスを含む一学年五クラスでした。仕事の内容は大体理解していたつもりでしたが、専門的なことも多く、自分の知識のなさを知りませんでした。化学の実験には常に危険が伴います。特に薬品は、特性を十分理解した上で使用しなければなりません。そのため危険が予想される実験は、先生方から実験の内容や方法など事細かに指導していただいで準備したことを思い出します。昭和四十九年、毒物劇物危険物取扱要領が定められ、毒物劇物危険物の在庫の確認、月別使用量を管理台帳に記載するようになり、安全管理のため毒劇物取扱責任者の資格を得ました。

実験授業がスムーズにできるように先生を補佐し職務に専念していく中で、生徒との関わり、薬品の保管管理、仕事の明確化など、幾つかの課題に直面しました。特に実験授業への関わりについては新任当時には戸惑うことも多く、先輩方のアドバイスを、研修会で指導主事の意見を伺い、職務に生かすように努めました。

さて、異動は最大の研修の場と言われますが、転勤した普通高校（八クラス）は、何人もの新規採用の先生を迎え、研究授業・実験授業の予備実験など、失敗したり成功して喜んだり、教科中心の仕事でした。若い先生方の新しい感覚を生かし、今までの経験を基

にして先生方をサポートすることができました。そしていつも先生方とコミュニケーションを取り、信頼関係のなかで仕事ができるように心がけました。そのために気づきやすいものも私たちに課せられたものであり、そうすることで先生方の考えや実験方法、実験授業への携わり方が見えてきます。実験授業の終わりの「お世話になりました。」「ご苦労様でした。」の会話は、その表れであり充実感・達成感を味わうことができました。

もう一つ大切なのは、生徒との関わり方ということです。ある日のことでしたが、学校で問題を起こした生徒が隣室で指導を受けていました。昼食時、どんな様子かとお茶を入れて話しかけたことがありましたが、最初は口数も少なく無表情だったように思います。しかし何度か尋ねると少しずつ話をしたり表情も明るくなって、笑顔であいさつを交わすようになってきた頃、生徒指導部長から「お世話になりました。」の言葉でした。些細なことでしたが、生徒には何が必要で何が大切なのかを知らされた思いでした。先生方を側面からサポートすることで、違った立場で生徒と関わり、共に生徒の成長を見つめていく喜びがありました。

現在の高校では教科以外に部活動、教育相談、総合的な学習の時間と生徒に接する機会が多くなりました。茶道部では学校祭に向けて稽古に励んだり、高文連の交流会の担当校として責任を果たしたりと、生徒と力を合わせて一つのことを成し遂げた事で、喜びを分かち合うことができました。いろいろ身近に接していると、心のつながりもできて教えられることも沢山ありますが、生徒にとって大切なことは、自信を持つことでしょうか。今、部活動、総合学習を通し、日本の文化を伝える事で何かを見つけてほしいと願っています。

栃木県立矢板高等学校 渡邊 道子

・おいたち

「小学校一年時欠席五十日ぐらいかな」

熱を出したり、風邪をひいたり、弱虫で泣き虫で体育嫌い・そんな私が体育教師に。

幼い頃「寒くないか」「あぶないよ」と心配性の母親がいつも私の行動に注意を与えていた。だから、私はいつも限界までの生き方はせず甘えの中で生活していたように思う。

しかし、中学校でバレーボール部に入部した。それは、母親からの脱皮でもあったのだろう。部は、いつも出ると負けであり、私は心の中で「勝つ喜びを味わいたい。」と思うようになりながらも、体を動かさず汗することの快感を体得した。そして、もっと強い部活で活躍したいと思い、高校でバドミントン部の門をたたいた。そこは勝つための練習をしており、甘えや弱音は許されない場であった。しかし、このことが私をバドミントンの「とりこ」にしたのは事実であった。その結果、念願叶って、インターハイで優勝できた。それは以後の生活に大きなウエイトを示した。泣き虫で、体育嫌いだったし、勿論運動能力不足。だから「人より沢山集中した練習」をモットーに取り組んだ。

・そして体育教師に

大学卒業後は教師しか選択の余地はなかった。大学入学後まもなく父親と死別、教職を継続することが両親への恩返しと、いつも胸に秘めての生活であったように思う。

初めての教壇は、真岡農業高校（現真岡北陵高校）であった。今では考えられないが、赴任一週間目にバドミントン部の合宿があった。そして二年目に関東大会で優勝できた。

嬉しくて熱いものがこみ上げてきた。当時その教示の方法はがむしやらであった。

七年後、芳賀高校に転勤、バドミントン部を作ったがなかなか環境も許されず、四苦八苦であった。そんな中、今までバドミントン競技ができたのは、協会の方々のお陰であり、その恩返しがしたく、バドミントン協会の事務局長として、裏方で協会を支えようと大きな決心をした。教師生活の最後は母校へ、私が汗を流した体育館の床の上で再び後輩と共に活動できる。これ以上の喜びはなかった。

後輩と共に十三年、インターハイや国体に出場するたび、彼女たちと抱き合い落とした涙は数知れない。「助け合って成る」「努力は嘘つかない」「頑張れ自分」「頑張る君は美しい」「いつかはきっと」「元気があれば何でもできる」「明日があるさ」等々これらのことばの裏には大きな決意や思い出や涙はつきものであり、一生懸命さは相手に通じることを経験した。

沢山の生徒と出会ったから、いや頑張る生徒がいたから教師生活に情熱を注ぐ事ができ、楽しい日々を過ごせたことに感謝している。生徒を信じ「いつかはきっと」の精神で汗したことに後悔はない。三月三十一日まで共に汗した部活動は、校務分掌の一つであるが、私にとって「与えたもの」「得たもの」は大きい。たかがバドミントンされどバドミントンではあるが。

退職した今、まだまだつながつている卒業生たちと楽しいバドミントンを通して、さらに大粒の涙を流すのも間近だろう。

「部活動は素晴らしい。」と力説するそんな教師がいてもよいのではないだろうか。

栃木県立真岡女子高等学校 大島 喜代 子

## 命が教えてくれる教育

私はこの春に農業教員としての三十八年を終了し、現在は大学生を相手に講義をしています。季節の移り変わりの中で改めて農業教育の素晴らしさを噛みしめております。振り返りますと、昭和四十五年に喜連川高校に赴任したのが昨日のこのようです。その頃を想いますと、己の未熟さに恥ずかしくなることも多々ありますが、親密な人間関係の中で様々な大切なことを学ばせていただいた貴重な時期でもありました。

特に三年先輩のS先生との出会いは大きなできごとでした。当時、S先生は私のクラスの副担任であり、農業科の畜産を担当し、陸上部の顧問をしていました。

毎朝六時半には農場に顔を出し、牛舎内を清掃し、一頭一頭の牛に声をかけ、頭を撫でたり餌を与えたりして牛達の状態をチェックし、その後には早朝登校の生徒たちと一緒に搾乳をする。これを徹底してやっております。牛舎は木造の粗末な施設でしたが牛達はいつも清潔で美しく見事なものでした。S先生は部活動にも意欲的に取り組んでいました。時間があれば必ず運動着に着替えて生徒とともにグラウンドを走り、忙しい時は必ず指示を与えて練習させていました。大きな声と明確な目標で生徒たちを引っ張っていました。私はS先生のこうした逞しい実践力と指導力に心の底から魅せられ、農業という教科にも大きな魅力と可能性を感じていました。

「良い牛を育てるには、牛を好きになることだ」がS先生の口癖であり、「最高の牛を育てて見せなければ教育にはならない」とも言っていました。そして牛のお産には例え昼であっても夜であっても必ず生徒たちを立ち会わせました。畜産専攻の生徒たちにはいざ

という時のために子牛を引っ張る準備をさせ、それ以外の生徒たちには静かに見学をさせました。

私も何度か立ち会いましたが、母牛が産みの苦しみを迎え、やがて苦しそうな唸り声を発し始めると、生徒たちからは誰かとなく「頑張れ」「頑張れ」の声がかかってきます。そうして何時間かが経過し、やがて子牛の鼻先が見えはじめる頃には、生徒たちの「頑張れ」の声もさらに真剣みを帯び、母牛の力みに合わせて合唱のようになっていました。そしてついに子牛の全身が現れた瞬間、見守る生徒たちからは拍手と歓声が湧き上がり、「良かった」「良かった」の大合唱で誰もが喜びあい、目を潤わせていました。

日ごろ、ツツパリだった生徒も、落ち込んでいた生徒も、我儘だった生徒も、誰もが深い感動の中にいました。言葉で表現するのが困難な程、感動的で素晴らしい教育がそこにはありました。こうした原体験が私の教育観を決定付ける大きなインパクトとなり、以後、私の基本理念は「良い生徒を育てるには、生徒を好きになること」となりました。

改めてお世話になりました多くの先生方に感謝いたしますとともに、我々農業教育に携わる者は、「教材」が命を持つ「生き物」であることを忘れてはならないと思っています。

時には教材そのものが、「生き物」としての「命」の営みを通して教えてくれるものがあります。そして、この「命」が教えてくれる教育こそ、経営論や技術論とは別の次元にある農業教育のもう一つの大きな魅力であり大切な教育であると思っています。

是非とも多くの先生方に素晴らしい教材を育てて頂き、教材である「命」が教えてくれる教育を大いに推進して頂ければありがたいと思います。心から期待して筆をおきます。

元 栃木県立宇都宮白楊高等学校 柴田 富男

この度、多くの方々の協力をいただきまして、本冊子「先輩教師からのメッセージ——高等学校・特別支援学校編——」を発行する運びとなりました。玉稿をご執筆くださいました教職員の皆様に、厚く御礼を申し上げます。

ご提供いただいた玉稿は、生徒との出会い、同僚教職員や保護者とのかわり、授業研究、学校経営、求める教師像、自己研修、教科・科目の追求などの視点で分類し、順不同に編集いたしました。

「生徒の成長や教職員の資質向上・学校力の向上のために大切であると考えていることで、後輩教職員に是非伝えておきたいこと」について書かれている先輩教師からの熱いメッセージが、本県の学校や教育機関のみならず、広く全国の方々に読まれ、学校教育の充実に役立てていただければ幸いです。

なお、本冊子の内容につきましては、平成十九年度作成「小・中学校編」とあわせ、栃木県総合教育センターのホームページより、ダウンロード可能です。

(<http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/>よりバナーをクリックしてください。)

### 先輩教師からのメッセージ

—— 高等学校・特別支援学校編 ——

平成二十年十一月

発行 栃木県総合教育センター

編集 栃木県総合教育センター研究調査部

〒 330-0003 宇都宮市瓦谷町一〇七〇

電話 〇二八（六六五）七二〇四

FAX 〇二八（六六五）七三〇三

URL <http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/>

印刷所 株式会社 松井ビテ・オ・印刷



いきいき栃木っ子3 あい運動  
—学びあい 喜びあい はげましあおう—